267
313

◎新刊發賣廣告◎

五段　自覺坊熊谷嚴勵編輯

新撰碁學活法

和裝頗美製本　全三冊　定價五拾錢

特賣金四拾錢　郵稅六錢

卷中碁目

碁局、權與、合戰、審局、度情、洞微、雜說、布置、取捨、圍碁十訣、留碁互先ノ起因、碁先締、合打部、損德珍瓏ノ問題、配石法、互先ノ部、二目ノ部、三目ノ部、四目ノ部、本因坊安田秀策（七段）、互先太田雄藏（七段）、二十番爭碁、鈴木美八（五段）、內垣末吉（五段）、小林鉄次郎（六段）、熊谷嚴勵、郵便研究碁

本書ハ熊谷氏自ラ古今ノ碁書ニ就キ其髓髓ヲ鍛ヘ多年研究辛苦ヲ積ミ開發的碁學速成ノ碁書ヲ編纂セラレタリ此書一度熟讀玩味スルトキハタトヘ良師ナキハ勿論其理義ノ何物タルヲ解セザル者モ速ニ上達スベキ良書ナリ乞フ好碁棋ノ諸君一本ヲ購ヒ棋學ノ師友トセラレンコヲ

發行所　大阪市南區心齋橋南詰東ヘ入　名倉昭文館

電話南千百〇五番　振替口座二千五百六十番

（八段）關根金次郎講評
（七段）阪田三吉編輯

大好評忽チ三版

新撰詰將棋名人集

和裝頗美製本全一冊
各名手肖像寫眞挿入
特價金二拾五錢
郵送料金四錢

本書は將棋の名人關根金次郎氏阪田三吉氏外十七人の考案に成る詰手百余題に一々説明を附しあれば初學者も容易に了解し得對局には
（關根八段、阪田七段）仝（關根、小阪四段）（關根、貴多五段）（貴多、馬塚五段）（馬塚、高橋五段）（關根、中原五段）（大橋宗桂名人、伊東印壽、上手）（關根、原田）（後藤四段、田邊）（阪田、藤内六段）（藤内、木見五段）
之に解説を加へ關根氏の講評あり
卷首には各名手の肖像寫眞を挿入し出題者の列傳棋話を掲げたれば趣味深く研究の資料として眞に好指南書である

發行所　大阪市南區心齋橋南詰　名倉昭文館
電話南千百〇五番
振替口座大阪二千五百六十番

山口 酒テン童子

特11
280

相馬太郎後編

酒呑童子

淺川富士丸口演
松月堂魯山補
吉田松茵速記

44.10.7

第一席

エ、愈々本日より大江山鬼賊退治の本文に入りますが、四天王が大江山へ乗込むに就ては、酒呑童子の黨類を悉く誅伐致さんければ相成りませぬ、當時賊は何う云ふ樣に立籠つて居つたかと申します、先づ本編の主人公相馬太郎、即ち酒呑童子は丹後の大江山千丈嶽を棲家とし、茨木童子は丹波の鬼ヶ城に寨を搆へて居る、それから棟牛は江州の脇吹山に楯籠り、最後に酒

呑童子の股肱と頼まれた袴垂保輔は、江州高島に賊壘を構へ、これが都路を荒して何もならぬ、それ故朝廷から源頼光公へ、賊徒退治の命令が下りました時、第一番に退治致さんければ相成らぬと、御評議になりましたのは、此の袴垂誅伐、次に酒呑童子と云ふ順序、依つてこれより袴垂誅伐より口演致しますが、前編にも申しあげました如く、普通の大江山と違ひまして口演者のは餘程變つて居りますから、其のお積りにて御愛讀あらん事を願ひ上げ奉ります、殊に袴垂の傳に至りましては、餘り同業者が伺ひませぬ至極面白い所を御披露に及びまする……さても平將門は、天慶三年二月十四日辛島の一戰に滅びて了ひました、其の時の總大將は、參議右衛門督藤原忠文でありましたが、忠文は討手の大將の中で、後備に廻りました藤原致忠に言ひけるやう、忠文「致忠どの、上平太貞盛、俵藤太秀郷が武功により、朝敵一時に滅んだる事、公私の大幸これに過ぎ申さぬ、

然はあれど偶々勅令を蒙つて、討手に向ひながら、箭一筋も發さいるのみならず、敵國の形勢をも知らずして、歸路なすは本意なき事にござる、されば其處許はかの地に赴いて、貞盛等に面會致して、合戰の次第をも聞き、尚愛黨もあらば、搦め捕つて、後難を防がれたい、斯く差圖を致しましたから致忠は致忠」委細承りましてございます」と此處より手勢僅かに百五十騎を率ゐて、下總國に出て來ました處が、貞盛、秀郷は最早將門が首を携へて、上洛した後でございましたから、是非なく其の日は、辛島の軍跡に幕をうたせ、樣子を見屆けることに致しました、が此の時は尚日も高うございますゆへ、藤原致忠に於ては、武藏なる觀音を拜せんと、淺草に宿を求め、郎黨二三人を從へて馬に跨り、かの寺に詣で、祈念終つて歸らんと致しますに、樓門に繋いで置いた馬が、何處へ行つたか姿は見ねぬ、これは不思議と、彼方此方を探しましたが、更に行方が知れま

せぬ　致忠「ム、、、ては近き邊の惡者が、盜み去つたものと覺ゆる、者共それッ追掛けい」と兩人の郎黨を東西へ走らせた後、

致忠「コレ歸らう　郎黨「ハイ」　致忠は一人の供を俱して、豫ての宿へ立歸つて來ました、所が歸つて見ると云ふと、書院の庭に篝火を燒いて、いと怪げなる大男が縛り置いてある、それから其の傍に、年の頃二十歳許りでございませうか、麥匂やかに艶たる女子が一人、涙ぐんで俯向いて居りますから、致忠は眉をひそめ　致忠「コレよ、彼等は何者ぞ」　問はれて一人の郎黨「申しあげまする、私黃昏に、御陣の內外を見廻り居りました處、之れなる男が一疋の馬に此の女を乘せて、南へ走るさまいと怪しうございますから、取押へて馬を見ますれば、御主人の乘馬にございまする、之れ問はずして賊なる事明かでございますから嚴しく來歷を責問ひまするけれども、いまだ白狀致しませぬ、依て君の歸り給ふを待つて居りましたのでございまする」と云

ふのを聞いて致忠は　致忠「ム、それは手柄であつた、實は斯樣々、夫々へ者を走らせたが、馬が歸つたとは喜ばしい」言ひながら、かの女の形容を見まするに、賊の妻とも思はれませぬ、其處で兎に角これが由來を問ふたなれば、事解るであらうと、女を近く招いた　致忠「コレ、其の方は何國のものにて、何故かの賊の馬に乘走るぞ、明白に告げよかし」尋ねたが彼の女は、頭も得あげず　女「はい……」と答へたのみ、兎角言兼ねて居る風情でございますから、致忠はさま〳〵と賺し、尙もしば〳〵問ひましたから、女はやう〳〵涙を押へて　女「ハイ、再三のお尋ね有難う存じまする、實は妾事は、下總國磯橋の鄕士、根鴻實氏の娘でございまして、名は節折と申すものにございまするが一家親族は平將門の爲に殺されまして、妾只一人がやう〳〵の事に遁れ出でました、併し寄邊なき身は、歸るべき家もございませぬ、只廣島山に些の由緣がありまするを便り、憂き年月を

送つて居りました處、此の十三日の軍に、廣島の民は總て燒夫はれましたる爲に頼みと思ふて居りました人も、行方知れずに相成りましたゆへ、妾は此處彼處と彷徨ふて居りましたのを、これなる男が、理不盡にも誘拐したのでございまする、憐れ殿さま、お救ひなされて下さいませ」と言終つて、早や胸迫つたか、只管泣伏しました、聞終つた致忠は、そゝろ憐れを催して

致忠「ム、、左樣の事にてあつたるか、よい〳〵必ず心配致すに及ばぬぞ、予が宜きに致し遣るから……、コレ者共、其奴を窮問致せい」ハッと答へて郎黨は、かの大男を窮問致しました處が、遂に苦痛にや堪ねざりけん　○「白狀致しまする」と聲かけた、そこで聞いて見ると、此奴は眞風太郎と云ふ山賊であつて全く此の女を誘拐したものと云ふ事が解りました。

第二席

そこで致忠は、右の山賊を斬罪に行ひ、節折の寄邊なき身を憐れんで、都に連れ歸りましたが、此の致忠には小供二人ありまする、長男は齋光と云ふて、今年十四歳、二男保昌は其の頃まだ吉松丸と云ふて八歳でございます、奥方は元明親王の御娘で人間の種ならぬ竹の園生の、貴き御身でありましたが、無常の風は逃れ難く、節折が來ましてから間もなく、雪とし消ねて失せられた、小供兩人を殘されて、女房に死なれた位困ることはございませぬ、殊に致忠は寢覺淋しく思ふものでございますから、何日しか節折を側室として置いた、而して兩人の小供の世話をも頼みましたが、節折程なく男の子を出生に及びました、

此の子こそ後に袴垂保輔となる人物でありますが、生れながらにして普通の小供とは人相が違ふ、左の眉に黒痣がある、雲月を吐くが如き有様でございますから、これをば鬼丸と名付けました、我が子が出來ると、先妻の子を疎ずるが世の常でございますが、節折は能く物の解つた女で、今まで致忠に恩を受くるのみならず、夜の衾を共にするの情を得たものでございますから、これを思ふこと深く、他の子我が子の隔てなく、齋光兄弟を勞ること、乳母といへども及ばぬ位、それ故致忠は此の有様を見て、さて〳〵此の女の詳しき身の素性は、まだ聞及ばぬが、其の健氣なる志しは、先妻にも勝つて居る、よい側室を得たものであると、喜びまして、尚更節折を愛でまする、女は己を愛するものゝために盡すとかや、節折もなほ〳〵己を省みて能く内を納め、露ばかりも偏執の心がない、よつて家内は至極平和でありましたが、天慶四年も夢の如くに暮れて、明くれば

五年、早や二月と相成りました、或る日のことでございまする致忠は大内の宿直をして、朝まだきに我が家へ退き歸りまする、兩人の小供は「お父上、お歸り遊ばしませ」と玄關に出迎をしたが、平日に變つて、節折は出迎はんともせず、節折は鬼丸をかき抱いた儘、柱に身を寄せて、物思はしき体でございますから、致忠は不思議に思ひ、其の邊に立寄つて致忠「コレ何うした、何處か氣分でも惡いか」尋ねたが、節折は頭を垂れて返事もせぬ、致忠はまた〳〵怪んで致忠「節折何うしたのぢや、御身は我が家に來つてから早や三年、已に一子をも儲けたことであるに、何の恨みに思ふことがある、併し節折や、我日頃疑ふて居ることがある、御身は毎月十五日には、必ず平日に變つた樣である、假令如何許り、愛きことがあらうとも、我れに隔てあるべき樣もないに、如何なる譯か、話して聞しや」言つたが節折は尚も返答せず、うち伏してありましたが、折しも邊りに

人もなければ、やう〳〵の事に重げなる頭をあげ　節折「ハイ、斯くお尋ね下さいまするに申さぬと云ふは其の罪ます〳〵深い事にございまする、いづれは申さいでならぬ事でございましたが何となく恥かしくも苦しくて、語るに序を失ひましたことゆへ今日まで過した事にございまする、今ぞ我が身の素性を申しあげますれば、お聞きなされて下さいませ」と云ふに、致忠もハッと思ふた　致忠「ナニ、我が身の素性、下總磯橋の郷士が娘とばかり聞いて居たが、如何にも聞かう〳〵　節折「はい、實妾ことは平將門が股肱の臣と頼みました武藏權守興世が後妻でございまする　致忠「ゲエ、其身は權守興世の……　節折「左樣にございまする妾かの家に嫁入りました次の春、即ち天慶三年の合戰に、良人興世は土民に生捕られ、貞世も討死致したと聞きました時の悲しさ、其の時死すべき身でございましたなれども、良人の胤を懷姙致して居りましたゆへ、何國へなりとも身を忍び、產落し

たる後、如何やうにも致しませうと、郎黨武程に助けられまして、淺草邊に參りました處、武程が何處よりか一匹の馬を牽來り、妾を乘せて走らんと致しました事より事起り、端なくも君に召捕はれましたが、武程は自ら賊なりと僞つて斬せられ、妾を救ふて呉れました、これより君の寵恩を受け、一子を擧げたことにございまするけれども、之れは正しく興世が胤でございまする、斯くばかり君を欺きましたこと、寄邊なき身とは申しながら、いと罪深い事にございまする、それを思へば一日も存ねる心はございませんに依り、妾は龍丸を殺し、自害して果てんと思ふて居たのでございまする、我が君にはお許しなされて下さいませ」と云ひ終つて袖の下より、懷劍スラリと引拔き、己に覺悟の体でございますから致忠は驚いて　致忠「あれ、早まつは、相成らぬ」と其の懷劍をもぎ取り　致忠「其方の素性逐一聞いて驚いたが、今更死ぬるにも及ぶまい、併し此の上は我が家に

置くことは出來ぬにより、東路へ赴くやう、郎黨を一人差添へて遣るから……」心根優しき致忠の言葉に、節折は熱き涙を落して、再生の恩を謝しました後、節折はこれより用意に及び、朧丸を懷中に致し、郎黨の正道と云ふに連れられて、東路さして發足に及びましたが、木曾の山中に於て節折が危難の一節と云ふ、次の席に申しあげまする。

第三席

去る程に節折は、朧丸を抱き郎黨正道を連れて、信濃路なる木曾の掛橋の里へ出て來ましたが、此の邊にいと怪しき老婆がある、我が子を失ふて悲しさの餘り、死骸を埋みもやらず抱寢して居たが、遂に喰ひ盡して了ふた、これからと云ふもの氣が亂

れて、恰も鬼女の如く、人の子を見ればこれを取喰ふこと屢々でありましたが、今此の老婆、掛橋にて端なくも正道に出會した、忽ち鬼相を現はして、正道に喰ひ付かんと致しましたから正道は此の不意に刀を拔く隙もない、汝れッと云ひさま老婆と直ちに引組んだ、所が此の所は路が狹くて、進退自由に相成りませぬから、遂に組合つたまゝ、數千丈の谷底へ落入つた、憐れ生死も知れず相成つて了ひました、節折は見るより魂消ね胸塞つて、そのまゝ其處にうち臥して了ふたが、里人等がこれを見付けて、節折を助け起しさまゝに介抱をした、事の体たらくを聞いて、里人等は氣の毒に思ひましたが、中にも弓矢村に住居をする橘平と云ふ人がございます、實直に致して至つて武藝を好み、仁心厚きものでありましたから、いたく節折の身の上を憐れんで橘平「そりやお氣の毒なこと、ちやと云ふて今更詮ないこと、切めてかの郎黨の死骸なりとも尋ね探して、葬つて

あげたい……、喃六郎二さん、お前と兩人で、此の谷間へ下りて見やうぢやないか」言はれて彼の六郎二と呼るゝ男、元來慾深き奴ですが六郎「成程、ぢや橘平さん、一緒に谷間に降りる事にしやう」と云ふので、それから二つの籠に乘つて、村人を頼み綱元を持せ、谷底へ繰下しましたが、谷底は石高く水淺く、寒氣膚を侵して、たゞ烏羽玉の夜に異りません、眞闇で何が何やら、サッパリ解りませんから、豫て用意の松明にて、やう〳〵に死骸を尋ね當てました、が兩人とも組合ッた儘で、五体は碎けて最早死んで居りまする、そこで正道の死骸をば、豫て持來つた尙一つの籠に入れて、さて之れから引上げやうと云ふ一段でございまする、所が六郎二の奴は、正道の懷中に致忠から路用に當てられました百兩の金を持つて居ります、それをば早くも見付けて、密かに取らんと致しますから、橘平がこれを眺めて橘平「これ〳〵六郎二さん、左樣の事をしては宜くない、矢張

死骸につけて置きなされ」言つたから六郎二は、一旦その意見に從ふたが、百兩の金子を見て、慾心起つて止み難い、俄かに惡意を起して、綱を引上ぐる時、途中にて橘平の乘りし綱を、刀にてサッと切ひました事ゆへ、何かは以て堪りませうや、橘平は憐れむべし、眞逆さまに落ちて死んで了ひました……、六郎二は一人引揚げられて六郎「やア皆の衆、氣の毒な事が出來た、橘平は途中にて綱が切れて、眞逆樣に落ちて了ふた、兎ても生命はないが、飛んだ事が出來ましたわい」と空涙うま〳〵と言欺いて、終に百兩の金子は六郎二の懷中に這入つて了ひましたが、かくて六郎二は、情らしくも節折を勞つて、我が家へ伴歸つたが、六郎二は惡事の露顯を恐れて、其の夜節折親子を殺さんと致しましたが、不思議の術ある僧が、此の家に泊り合せて居て、節折を救ひ出しました、それが爲に六郎二は、僧の術にて刀を持つたまゝ氣絕いたし、暫し正氣もありません

でしたが、やう〳〵妻の介抱で蘇生をした、その妻と云ふのは六郎二に似ず、至つて實直の女でございましたから、最初から六郎二を諫めて居りましたが、更に用ひない、ます〳〵強慾の振舞をした、これぞ遂に身を滅す基に相成るのでございますが、それは後のお話……、さても節折は不思議の生命を助かりまして、又もや夢路を辿る心地で、かの僧に助けられ、都の方へ行かんとして路六七里も來たかと思しき時に、この僧俄かにアッと叫んで、地上に倒れ正氣もない、節折は驚いて節折「あれ御坊さま、お氣を確かにお持ちなされませ、何うなさいました」と呼べど叫べど何の返事がない節折「あれまア因つた事が出來た、今は杖とも柱とも頼む此の坊さま、呼活けんにも名前も解らぬ何處か此の邊に水はないか知ら」と狼狽へ廻つて居りまする折、柄、年頃四十餘とも相見ねました尼さんが一人、西の山路から登つて來ました、節折を眺めて言ふやう　尼「コレ御婦人、何故

斯く周章てなさる、その法師こそ御身が仇となるべき人でございますぞ、敎へ喩すべきことありまする、いざ我が庵へお出でなさるやう」言ふかと思へば、先に立つてサッサと歩み行く、此の言葉を聞いて節折は、不思議の思ひを致しましたが、その尼さんなるものを見れば、何う見ても尋常の尼法師とは違ふ、所謂仙人天女の如く思はれましたから、何は兎もあれ從ひ行かんと、節折は咄嗟の裡に決心した、遂に僧を捨てゝ、かの尼の後に從ふて行きまする事、凡そ五六丁參りますると、一つの高い山がある、而して此の所に怪げなる柴の門がございます、やがて其の中へ這入つて見まする、家の中小サッパリとして、如何さま閑雅の桑門が住居と相見ねましたから、節折も少し心を落付けました　尼「サア御婦人、其の水にて足を洗ひ、此方へお上り……節折「ハイ、有難う存じまする、御免下さいませ」と尼の言はるゝまゝに、筧の水で足を洗ひ、驢丸を抱きながら、

爐の邊に坐りましたが、さても此の尼さんは如何なる人か、節折が身の上但しは鼠丸は如何成長致すか、おひ〳〵面白きお物語に相成りまする。

第四席

かの尼さんは節折に澁茶を勧め、自分も啜つたる後口を開き、

尼「コレ御婦人、私は御身を能く知つて居りまするが、貴女は致忠朝臣に所縁のあるお方でございませう、言はれて節折は吃驚した節折「あれ、何うして妾を御承知でございます　尼「いやお驚きなさるは御道理、私は何を隠しませう、陰陽頭加茂の保憲が妻でありましたが、所夫に後れましたゆへ、その菩提を吊はん爲、剃髪して妙藏比久尼と號して居ります、此の所は阿計呂

の山でありますが、先刻の法師は播磨の道魔法師といふものでかれ久しく私の所夫に從ひ、天文歴數を學びましたけれども、志氣奸邪に致して、才を妬むの小人でありました故、所夫保憲は其の奥旨を傳へずして、これを阿部晴明に授けたのでございまする、それ故道魔は所夫を怨んで、遂に逐電なし、野州二荒山の邊に住むと聞いて居りましたが、先程あれへ來たものと見ねます、なれども彼も尋常のものにはございません、能く式神を使役して、風を起し雨をよぶ術を持つて居りまするが、かれ御身が色に愛で、淫心を崩しました事ゆへ、式神暫らく身を離れて絶入つたのでございますが、彼等は共に事を計るものにございません、依て私が御身を誘ひ來つたので、今頃は道魔も、自然と醒めて、遁歸つて居るでございませう」と云ふ話を聞いて節折は、妙藏尼の神機妙算を感じ、且つ喜びました節折「あれ左樣でございましたか、斯くお知らせ下さいまする上は、隠し

包むも由ない事でございます、妾は致忠の側室節折と申すものでございます、固より妾が素性は申しあげずとも、お察しでございませうが、尚此の上の吉凶を説示し給ひまするやう、お慈悲にお願ひ申しまする」妙藏尼は點頭いて妙藏「されば節折どのとやら、その恩愛を斷ち、早く其の兒を捨てなさるやう、此の兒の相を見まするに、後必ず九族に禍ひするやうに相見ゆます私の言葉に從ひなさるやう」と之れより尚も佛の道を、懇々と說き示しましたから、節折も大いに悟つて、此處に煩惱を解脫致しました節折「段々の御致ね、肝に銘じましてございまする、此の上は佛の敎に心ほ寄せ、此の兒を捨てまする事でございます」と法門に入らん事を決心致しました……、お話變りまして かの那女川の六郎二でございます、圖らずも百兩の金子が手に入りましたから大喜び、當今なれば百兩の金子位、一向に使ひではございませぬが、その頃の百兩と云へば大したものでご

います、それゆへ六郎二は、これを以て生涯の活計をなさばやと、四里餘西なる白浪坂と云ふ所へ、一箇の酒店を開きました百兩の資本をおろしたのでございますから、丁稚なども使ひまして、相當の商人と相成り、何不自由なく暮して居りましたが或る夜の事でございまする、おこそ頭巾を被りました品の宜い一人の婦人が、子供を負ふて六郎二の店へ遣つて來ました 女「御免下さい 六郎「お出でなさいませ 女「あの御面倒でございますが、お酒を二升樽に入れて戴きたうございます 六郎「へい承りました……、コレ岩吉、其處の二升樽を卸して、はかつて入れなした 岩吉「へイ 女「それでは御勘定は之れに置きます 六郎「へイ毎度有難う存じます 女「それで誠に恐れ入りますが、私の宅は直ぐ其處でございますから、一寸丁稚さんに……六郎「へィ〳〵宜しうございます……、岩吉、お供をしな 岩吉「へイ」言ふので丁稚は樽を擔いで、かの女の後について出ましたが、其の途中でかの

女言ふやう　女「ちよいと丁稚さん　岩吉「へイ何でございます　女「あの此處を通つた序　妾が久しく逢はぬ方の所へ、一寸様子を尋ねに行きますから丁稚さん暫らく待つて居て下され、直ぐ此處へ戻つて來ますから……岩吉「左様でございますか、待つて居りますで、行つてお出でなさいませ　女「有難う、それではお氣の毒ですが、此の風呂敷包と小供を預つて居て下さい　岩吉「へイ宜しうございます」云ふので彼の女は、風呂敷包と小供を、共に預けて置いて、立去りましたが、さて何うした事やら、待てども〳〵彼の女は歸つて來ない、其の中に夜も次第々々に更け て參りましたから丁稚の岩吉は、是非なく立歸つて右の次第を六郎二に物語つた、六郎二も不審に思ひながら、風呂敷包を開いて改め見ますれば、刀一腰に、一通の書面が附いて居る、封押切つて讀んで見ると、

「くれ竹の世にありて、生としいけるもの子を愛でであは

れまざるはなしと雖も、雪の雀の餌に飢ねては、夜の鶴の腸を斷つ悲みも如何にせん、賴もしき家と見奉りて、此の子を參らする賀儀に、酒一樽と刀一ふりを添へ侍り、ぬ、あはれ養ひ取りて、接木の花とも眺の給へかし」

と書いてございまする、正しく捨子でございますから、六郎二は大いに驚いた　六郎「やア岩吉、貴様は大變なものを預つたぞ、捨子ぢや〳〵　岩吉「へエ捨子　六郎「ム、捨子ぢや、確か二升の酒に換へて、こんな餓鬼を養へるものかい、今宵の中に、村境に擱み出して捨てゝ來い、馬鹿々々しい」といきまき罵つた、皆のものも呆れ果てながら「さて〳〵世の中に子を捨てるものは澤山あるが、賀儀として酒刀を添へたと云ふのは、珍らしい子の捨てやうもあつたもの……」とヒソ〳〵言ふのを聞いて、六郎二はます〳〵怒つて　六郎「ヤイ、お前等は何をフヂヤ〳〵言ふてるのぢやい、斯んな餓鬼を預かつて何うする、早う捨てゝ來ん

かい」と呟嗚つたが、此の捨子こそ抑も何者、尚またかの女は何處のもの、言はずと知れた節折親子でございまする、愈々麗丸惡事增長の發端、これより其の傳に移りまする。

第五席

六郎二の强慾非情より、餘りに罵り怒るから、女房の椹木はさま〳〵と夫を宥め、小供の顏をつく〳〵と眺めてありましたが

椹木「あれ貴方、此の子は何處かで見たやうに覺ねますが……」

と云ふに六郎二も心付き六郎「ホンに、お前がさう言へば見た樣に思ふ、はテな」と考ねて居りましたが、ハタと手を打つて、

六郎「ムウ、さうぢや解つた、此の子の背の黑痣に見覺がある、これはソレ那女川に居た時分に、宿を貸した婦人の子ぢや椹木「ホンにさうでありました、確かにあの時の……六郎「さても此奴を此處に捨つるからは、あの女も近き里に居るのであらうが、それにしても俺の家と知つて捨てたものか、または知らずして捨てたものか、怪しの事ぢや……」と六郎二は、心に百兩の事がありますから、たゞ茫然として居りましたが、妻の椹木は夫を諫めて椹木「モシこれも因緣でございませう、曩に貴方があの婦人を殺さうとしなされて、また此の兒を此處に捨てられたと云ふもの、つく〳〵思ひまするに、あの百兩のお金子は子の賜物でございます、されば此の子に家をも嗣せましたなれば、少しは罪滅しになりませう、殊に娘の深雪とは好い夫婦となりませう程に、拾ひ上げて育てなされませ」と勸めた、六郎二も氣が挫けて、六郎「成程、さう言やア惡い事でもない、ぢやお前の言ふ通りに任せやう」言ふので、終に評議一決しまして、その子の名を彌介と名付け、育てることに致しました、それで麗丸の

事でありますが、然るに成長するに從ひまして、惡がしこく盜み心があつて、酒の賣溜を盜むこと大したものでございますその盜んだ金は皆山中の土の中に隱し置いたといふ事でございますが、元來六郎二の家は、もと〳〵非道の金でございますから、一旦は榮ゆるとも、次第に衰ふるは當然の事、殊に彌介が日々の賣溜を盜んで居るから、今は殆ど商賣も立行かぬ困窮の身と相成りました、されば衣類道具なども賣盡し、奉公人は暇を出すといふ有樣、今は彌介一人と相成りましたが、或る時の事六郎二夫婦が物語を、密かに聞いて居ると、何うやら六郎二が、刀を賣らうと云ふ相談をして居るらしい、女房がそれを止めて、樵木「あれは貴方、彌介が捨てられた時に母親の形見に添へたものでございますから、如何に貧乏したとて、賣るのはお止しなれ」と云ふ、これをば彌介が聞いて、始めて此の事を知り「ムウ、さては母親の形見に、そんな物があつたのか、何うか

してその刀を我が所持にしたいものだ、併しいづれ六郎二は賣飛すに違ひない、よし〳〵一つ工夫を旋して遣らう」と此處に又も惡計を廻らしました……、此處に或る日の事でございます飛脚めきたる者が入來いて、酒を飲みながらの話に　○「此の度さる方の注文にて、刀を求めに都へ參る」と云ふのを聞いて六郎二は、欺されるとは露知らず、これ幸ひとかの刀を出して見せた　○「いよウ、これは業物ですな、賣物ですか　六郎「サア、直がよければ賣らうと思ひますので……　○「幾らなればお賣りですか　六郎「先づ金七兩なれば賣つても宜しい　○「成程、七兩なれば安くも高くもない直でせうが、合憎只今金三兩より持合せがありませぬ、三兩になりませぬか」言ひながら金三兩出して見せた　六郎「お持合せがなければ仕方がございません、餘り安いですから、三兩では賣られません　○「まからねば私の方でも仕樣がありませぬ、豪いお邪魔しました、此處に酒代を置きますが

ら……」飛脚はその儘酒代を拂ふて立出でた、後にて六郎二思ふやう「待てよ、今賣外しては何日買手があるか解らぬ、チッと安いが賣つて遣らう……、コレ彌介よ　彌介「ハイ　六郎「お前走つて行つて、今の飛脚を呼んで來い、三兩に負けて置きますと云つて……」彌介「はい、承りました、彌介はペロリと赤い舌を出しながら、飛脚を呼戻した、六郎二は刀を出して六郎「モシ、チッと安うございますが、まアお負け申して置きます、三兩でお買取を……」○「左樣ですか、それでは三兩確かに……」と先に仕舞ひました金を、包の儘に六郎二に渡し　○「左樣なら御免」と サッサと出て行つた、六郎二は眼前今包んだ金でございますから、開いても見ずに硯の抽出に入れましたが、飛脚が立去つた跡にて、出して見ますれば、麼はそも如何に、鍋金の鉄でございますから、流石の六郎二も吃驚しよつた　六郎「おやッ、さては彼奴に誑られたか、汝れ遠くは行くまい、跡追駈けて引づり來て遣らう」と周章て騒いで、駈出さうと致しますから、これを眺めた彌介は、六郎二の袖を捉へ　彌介　父ン待ちなされ、之れから東は路が二條になつて居りますから、父ンは街道を追ふて行きなされ、私は南の徑を追ふて行きますから……」と云ひ捨てゝ、彌介は先に走り出た、其處で六郎二は彌介の言ふが儘に、東の街道を追駈けて行きましたが、此の時彌介は、南の山路を六七丁走行きまするとかの飛脚は水立深き所に佇んで、彌介を待つて居る鹽梅でございます、彌介はやう〳〵走りついて、彌介「ヤア骨折だつたな、生馬の眼をも抜く我が父も、旨く欺され居つたのい　○「いや早や旨く行きました」と共にうち笑ひ、件の刀を取出して、彌介に手渡した、彌介はこれを受取つて、彌介「然らば褒美を得させるから……」と云ひも終らず抜打に、かの男を切伏せた、此の刀の能く切れること、干將莫邪に異らぬから、彌介はニッコとうち笑ひ、その刀を邊の松が根方に埋

め置き、かれが懐中を探つて、金三兩をも奪ひ返しましたが、死骸は谷間へ蹴落して了ひ、己が家にと立歸りました、抑も此の切害せられました男は、名を八郎五郎と云ふて、美濃國荒崎の惡者でありましたが、此の節木曾路に來つて野伏となつて居た、それをば彌介が旨く欺し込んで、此の仕事を計つたのでございます、幼少なれども彌介が心ぞ恐ろしい、かくて彌介は立歸つて、飛脚の行方知れざる旨を語り、六郎二を欺きましたから、六郎二も怒るといへども、詮方ございません、その儘泣寢入と相成つて了ふた。

第六席

かくて六郎二は益々困窮の身と相成り、今は商賣をも止め、彌介には馬を牽かせ、薪など樵せて居りましたが、彌介は一己の志氣を立てんと思ひましたこと故、たゞ山に入つては木に登つたり、又は水に入つて水練を試み、擊劍勝負の事にのみ心を凝しましたから、師匠なくして自然と其の妙を得、殊に持て生れた早業力量、兎ても大人も及びませぬ、早や十八歳の頃おひには、一角戰場にも出づべき壯者と相成りましたが、此處に話變りまして、六郎二が娘深雪でございまする、其の心ざま父には似ず、顏色も十分の媚あつて、清らかでございましたから引手數多ありましたなれども、六郎二は兎角金持を婿となし、衰へたる家を再び興さうと思ひます事ゆへ、其の婿擇びに日を送つて居た、然るに女房の椿木は、最初から深雪を彌介に娶さうと思ふて居りますから、深雪が幼い時分から「彌介はお前の夫であるから、仲よくしなされよ」と始終語をして居た、彌介もこれを聞いて居て、互ひに恥かしいに見ねて居りましたが、

早や年頃にも相成りますると、春の情が崩れ出でたと見ねる、いつしか彌介と深雪の兩人、假臥に枕並べてからは、いよ〳〵契淺からず相成つた、母親の椹木は、疾くより兩人の仲を知つて居りまする、けれどもいづれ近い中に夫に告げて、晴の夫婦にして遣らうと思ひますこと故、知らぬ顔して居りましたが、此方は六郎二「いまは只、頼む所は深雪のみである、好き婿を取つて、老木に花を咲したい」と考へて居ると、丁度長野の庄屋に富める人あつて、深雪を見初めてから、妾にしたいと云ふその事を媒妁するものがありましたから、六郎二は小躍致して喜んだ、早々媒妁人と一緒に、庄屋の家に至つて、此の事を相談致しまするに、造作もなく事が調ふて、深雪が衣服の料として、金百兩を受取つた、六郎二はたゞ之れ鞍魚の水を得たる心地で、己が家に立歸りましたが、女房に此の事を言ふて、また面倒ちやと云ふので、先づ當分隠して居た、所が此の事を何處

から聞出したが、彌介は此の事を聞いて「斯りや好い時節が來た、一計を廻らさんければ相成らぬ」と其の晩に、深雪が背戸に出るを待受けて、斯樣々然か〳〵の次第と物語をなし、終に舌にかけ、深雪を謀つた、謀られるとは夢露知らず、うぶな深雪は、彌介の言ふに任せて、父の寢床の下に置いた百兩の金子を盗み出した彌介「ヲヽ、旨く遣つて呉れた、これだけ金子があれば大丈夫、遠方へ欠落した後、新世帶を持つ程に、サア深雪躍いでお出で……」言はれて深雪は、惚れた男に目は見ねず、遂に欠落を致しましたが、龜ケ池と云ふ池の邊で休憩した時、彌介は固より欺す積りでございますから、俄かに悄氣返つた、總て惡事を働く奴は、此の芝居が上手だ、哀しうもない時に涙を流したり、腹にもない事を口先で旨く言廻す、所謂口車と云ふ奴でございます、正直者は兎角口車に載せられ易いから、御用心肝要でございますが、彌介奴旨く深雪をたらし込んだ……

彌介「あゝ深雪や、何うも悪い事をしたわい、たゞ一髢にお前が可愛さに、斯う欠落と出掛けたが、大恩ある養父母を欺して、さぞ今頃は探して居られるであらうと思へば、私は此處まで來て、急に良心に咎められて、何もならぬ、深雪何うしやう、寧そこれから歸つてお詫をする事にしやうが」言はれて深雪は、矢張良心に咎めらるゝか深雪「サア、私も悪い事をしたと思ひますが、と云ふて立歸れば、私は庄屋の家へ行かなければなりませぬ彌介「ムゝ、それである、お前が庄屋へ行けば、私は生きて居る心地はせぬ深雪「サゝ、私も其の通りでございます彌介「何うちや深雪、あゝ悪い事をしたと思へば、モウ之れから足は進まぬ、未來は一蓮托生と共に約した事であるから、幸ひ之れなる池、身を投げて死なう深雪「はい……彌介「私は最早生きる甲斐はない、先へ身を投げるから、お前も續いて……南無阿彌陀佛……」言ふかと思へば淘然と許り、身を躍らした、深雪はあれ

ッ……と驚いたが、今更何うにもならぬ、續いて身を投げました事ゆへ、苦みもがきながら、ズブ〳〵と沈んで行く、水中に樣子を窺ふて居りました彌介は、いよ〳〵深雪が死んだのを見定めて、岸に匍ひ上りましたが、百兩の金子は、以前に受取つて置いたことでございますから彌介「フン、旨く行つたわい、これにて思ひ殘す事はない、後は野となれ山となれだ」と獨言から〳〵とうち笑ひながら、遂に此の地を立去つて了ひましたが、流石は後に袴垂保輔となる人物、酢でも蒟蒻でも喰へた奴ではございませぬ、だが又之れと云ふも、昔六郎二が橘平を殺し、金を奪ふた應報にて、さま〳〵の禍起るものとも見られます、果せるかな碓氷荒太郎のために六郎二一命を落すと云ふ一條、次の席にて申しあげある。

第七篇

さても六郎二は、曉方に相成つて、始めて深雪が家にあらざるを知り、深く不審りながら、先づ床の下を探つて見まするに、隠し置いたる金子がございませんから膽玉轉倒せん許りに慌いた「ムウ、さては彌介奴、豫て深雪と言合せて、盗み出したのであらう、不屆至極の曲者ッ」と只管恨み憤り、胸塞がつて物をも言はず居りましたが、女房に尋ねられて、始めて縁組の事彌介と深雪の居らぬ事を物語つた、これを聞いて女房の椹木も驚き椹木「それ御覽、いつぞや貴方が刀を賣らうとなされた時に妾が止めるのをも聞かずして、其の刀を詐り取られ、いま又深雪にも告げずして、あれを富める家に遣らうとしなされた、凡

て皆慾より起つて、掛替もない娘を喪ひなされた、サア貴方、早う追駈けて呼返して下されと、頓でもない事をして下されたな」と泣聲立てゝ、六郎二を責立てるにぞ、六郎二斯く言はれて一言もない 六郎「いや私が惡かつた、許して呉れ、直ぐに後を追駈けるから……」と閉口の體、その中に夜も明はなれました事ゆへ、夫婦諸共立出でゝ、東西南北に、行方を尋ねましたけれども、更に相解りませぬ……所が其の翌日に相成つて、長野の庄屋から、深雪を迎ひ取らうと云ふので、乘物をつらして、人が遣つて來た、六郎二之れには困つたと、頭を惱したが據ろないから、其の日は病氣と僞つて、人を返しましたが、長野の庄屋はこれを聞いて、不思議に思つた、其處で人をやつて、密かに其の近邊の人に聞いて見ると、深雪は此の頃家に居らぬと云ふ事でございますから、サア庄屋どん怒り出した、斯う云ふ事は疑ひ出せば、何うにも解釋の出來るものでございますから、こ

れから毎日々々六郎二を責めて、娘を早く連れて來い、さもなくばかの百兩の金子を返せ、詐僞の仕業か、それなれば、此の方に於て處分をする」と言出したから、六郎二は今は言解くにも道がない　六郎「何うか今一兩日お待ちを願ひまする、實は斯樣々々の次第に相成つたのでございますから……」と事實うち明けて、一日二日と脱れて居りましたけれども、六郎二は氣が氣でない、庄屋は威勢あるものでございますから如何なる憂目に逢ふ事であらうかと、安き心とてございません「若し彼等兩人が、界隈の山里に匿れ居る事もあらうかと、日々彼方此方を駈廻つて、此の事に日を費して居りましたが、此處にお話兩つに分れまして、疑に六郎二の爲に殺されましだ橘平には、荒太郎といふ一人の悴がありました、至つて孝心深き上に、文武の道を好みましたが、當年二十六歳と相成りました、身の長は五尺八寸もあり、力は百斤の鼎をも揚げやうと云ふ、又怒つて眼を

回す時は、猛獸も忽ち斃れ、笑ふて眉を舒ぶる時は、稚子も早く懐かうと云ふ、尚其の孝心に於ては、信州十郡に類がないと云ふ、忠孝兩全智仁勇三德揃ふた、適晴れの若武者でありましたが、これぞ卽ち、後に左馬頭頼光に附從ひまして、四天王の一人と相成り、碓氷勢負尉貞光と名乘りましたは、此の荒太郎でございます、そこで此の荒太郎、母親が病氣でございますから、醫師よ藥よと一生懸命の介抱に、いろ〳〵と手を盡して居りまするが、一向に其の驗が見ねないから、誠に心配致して居りますると、これを見た或る翁が荒太郎に言ふやう　翁「荒太郎どの、其方の孝養實に感じ入るに依り、其方に良き藥を敎ねて進せやう、それは鹿の生膽を得て、それを藥になして、日毎に進めたなれば、母御の病氣は、自づと全癒する、ゆめ疑ひなさるな」これを聞いて荒太郎は、天地を拜して喜びました　荒太郎藥をお敎ね下され、誠に有難う存じまする、早速に尋ね索める

でございませう」と云ふので、之れから早速に弓矢を手挾んで山に分入り、鹿を索めましたけれども、一匹も出會しませぬ、早やその日も空しく暮なんと致しましたから、荒太郎は憂ひ顔をしながら、トボ〳〵山を下りかけました、お話變りまして、此の時から六郎二は、娘深雪を探しあぐみまして、白浪坂から遙か東なる野尻の山路を、これもトボ〳〵と一人歸り來よりましたが、關山といふ橋の袂へ出て來ました、此の谷川の源は龜ケ池から出て居りまする此の橋の下に鳥が數多集つて、カア〳〵〳〵やかましく鳴いて居る、六郎二は何となく胸騒ぎがするから、不圖橋の下を見ますれば、水に太つた女の死骸が、橋杭に掛つて漂ふて居る、それをば鳥がついばみ居るのでございますから、六郎二にはあれと驚きながら、若しや娘ではないかと、よく〳〵見るに、濡れたる衣物の模樣、深雪が着たるものに相違ない、六郎「ヲ、矢張娘ぢや、娘に相違ない、哀れ水

死致したのか」と忙はしく裸体に相成つたが、タラ〳〵ッと川に走せ下りた、死骸を引寄せて見ますると、眼の玉は抜出でゝ臍の邊は裂け破れ、大腸飛出して居る、實に目も當てられぬ狀でございますが、疑ふべくもあらぬ深雪が死骸でございますから、流石凶惡無慙の六郎二も、心忽ち弱り果て、暫し呆れて居りましたが、稍あつて思ふやう六郎「むッ、さては彌介奴が娘を欺き殺して、金子を奪ひ取り、一人逃去つたに相違ない、汝れ憎くい奴、養育の恩を仇として、我に幾許の苦辛を掛けたるのみならず、今また奴を殺すなどゝは、汝れ其の肉を喰ひ骨を挫いても、あきたらぬ奴、此の恨晴さいで置くものか……」と身の惡報とは思ひ悟らず、或は怒り或は歎き、死骸を陸に引上げましたが、再び思ふやう六郎「と云ふて家に一錢の貯へもないから、葬式を營むに由もない、殊に椹木に此の有樣を見せて、またいたく泣かれるよりは、此の所に埋め置いて、後に女房に語

ることにしやう、さうぢやく」と自ら氣を勵し、死骸を山陰に擔ぎ行き、これを埋めやうとする折しもあれ、ヒユウと鳴つて飛來つた一つの箭、六郎二が首筋へグサツと突立つた。

第八席

何處よりか飛來つた一本の箭に、六郎二はウンと云つたが此の世の暇、急所の痛手に起もやらず、そのまゝ死んで了ひました……、さても此方は荒太郎、終日鹿を獵りかねて、空しく家に歸らんと、此の山を下り來ました、時は丁度たそがれ時でございます、折しも向ふを見れば夏草の茂き間に、一疋の鹿が居りますから荒太郎は、我が物得たりと、よつ引いてヒユウと放つた、誤たず射留めたから、小躍り致してうち喜び、草押分けて

其の場に走り行き見ますれば、鹿にはあらで一人の老人、その身は裸体に相成つて、女の死骸を抱きながら、朱になつて死んで居りまする「歴は失策たり、誤つたり、如何はしやうか」と勞りました、けれども早や絆切れて居りますから、詮方ございません、荒太郎はドツカと草の上に座して荒太「ア、今は悔るとも甲斐はない、過失とは云ひながら、人を殺した其の罪は遁れ難い、いで潔よく腹かき切らう」と刀の柄に手をかけましたがまた思ひ返して荒太「いや待て暫し、斯くと母上がお聞きに相成らば、お生命にも關はるであらう……、あはれ何處の御人か知らぬが、兎ても死すべき身なれども、暫時の暇を賜へかし」と手を合し、南無阿彌陀佛々々と念じましたが、遂に自殺を思ひ止りまして、夢路をたどる心地で、たゞ鬱々と我が家へ立歸りました、が母親を驚かしてはならぬと思ひますから、今日の事は色にも出しませぬ荒太「母上、少し思ふ仔細もございますれ

ば、甲斐國に移り住みたく存じまする」と母親に語りて、荒太郎は俄かに家財を集め、之れを片荷と致しました、さうして母親をば橇に入れて片荷と致しましたが、これを擔ふて家を立出でました、さて道の程已に二三里許りも參りましたが、野の上の山を越ねまする時に母親が

母「荒太郎や　荒太「ハイ　母「喉が渇いてならぬに依り、水があれば飲してお呉れ　荒太「ハイ承りました其處等尋ねて參りますから、暫らくお待ち下さいませ」言ひながら平地なる石の上に母親を卸し置き、荒太郎は彼方此方と探しましたけれども、近き邊には清き流れもございませぬから、己むことを得ず、樵夫の通ふ道を二三町分入り見まする、一條の流れがありましたから、これ幸ひと、腰の刀を拔いて、鞘の中に水を汲入れた、親孝道な荒太郎は「さぞ母上がお待兼ねであらう」と急いで元の町に來て見ますれば、座はそも如何んと、其の邊に夥多しき血が飄れて居り母はその石の上に居らない、

ますから、驚き見ますれば、前の小松の下に狼の子が二疋、母親の肉を爭ひ食て居りますから、荒太郎は此の有樣に、奮然として走り掛り、刀を揮ふて直ちに一頭を切倒した、殘る一疋はこれに驚いて遁げんとするのを透さず飛込んで、之れをも眞二つと致して了ひましたが、勢ひ餘つて片邊の石に太刀を當てた爲め刀はポッキと折れて了ふた、その折柄其の形牽牛に等しき一疋の親狼、茨の蔭より走り出でましたが、大いに哮り狂ふて荒太郎へ咬つきに來た、荒太郎は刀が折れましたから、咄嗟の場合、枝を取延べ、腦上より擊たんと致しますると、狼は身を閃かして頭の上を躍り越ね、後の方から飛掛つて來た「何にを小癪な、親の仇敵……」と荒太郎は、彼方此方へ身を替し、忽ち一聲、ヤッと叫んで、持つたる枝を突出しまするとく、案の如く狼は枝に乘來る、「其處をば早くも拳を以て、強く眉間を打ちました事ゆへ、大力の一拳に眼くらくんで少し怯んで相見ねま

した、所を荒太郎逃さず左の手にて、その首筋をグッと掴み、一身の力を右の拳に入れて、ハッシ〳〵と續け打にした、さしもの狽も眼の玉コン〳〵と飛出し、遂に血を吐いて死んで了ふた、荒太郎は即坐に仇を報ひ盞して、老母の死骸をかき起して見ますれば、喉笛を喰裂かれて、血は流れて背を浸し、肉は破れて骨現はると云ふ、淺ましい姿でございますから、荒太郎は餘りの悲しさに、死骸に取付き、男泣に泣入りましたが、かくてあるべき事にございませんから、泣く〳〵遂の地を穿つて死骸を埋め、印に石を置きましたが、合掌し終つて荒太郎は荒太「あゝ、これと云ふも、前日過失とは云ひながら、人を矢先にかけたる報でかなあらう、其の時その場に於て切腹いたさうと思ふたが、母上ある爲に、暫時生命を惜んだが、今は心殘りもない、いざ自殺致して、母上のお供を致さう」と覺悟を極めました處から、折れたる刀を手掛に卷き、己に突立てんと致しますると、あら不思議やな怪しやな、一つの陰火、草むらの中より出で、荒太郎が側に寄るよと見ねましたが、忽ち腕はなれ痺れて、醉ねるが如くに相成つた、その折から後の方に人の聲して「荒太郎々〳〵」と呼ぶ聲に、ハテ不思議と振反り見ますれば、父と母とでございまする荒太「ヲヽ、貴方は父上母上、お嘉はしや……」と縋らんと致しますれば、朦朧と致して煙の如く、捉へやうもない、然るに判然と見ゆる父の橘平が橘平「コレ荒太郎、や、さのみ薄命を歎くにも及ばぬぞよ、其方已に神明の冥助を得て、圖らずも父の仇を報ひ呉れた、曩に其方が矢先にかゝつて、死んだる男は、即ち我を殺した那女川の六郎二であるぞよ」と昔ありし事共を物語つた。

第九席

此の不思議なる物語に、荒太郎は驚き且つ喜んだ荒太「さては國らずも父上の仇を報ひたのでございまするか橘平「如何にも左樣これにて最早我も思ひ遺すことはない、就ては其方は、之れより東國に參つて時節を待つやう、然らば名將に仕ねて、名を天下に揚ぐる事である、ゆめ疑ふな」言ふかと思へば、一陣の風サッと吹起つた、その風に乘るよと相見ねましたが、父母の姿は忽然と消ね失せて了つた荒太「あれ父上、母上、お待ち下され」と思はず聲をあげて、ヒョッと目が覺めた、これぞかの猛狼を討つて、心身勞れ、正に柴の上に倒れて居る中の夢でございまする荒太「ヲ、、さては今のは夢であつたかだが夢には正夢あり

邪夢あり凶夢ある、されど今のは正しく正夢昔より斯る例幾らもある、然らば夢の告に任せ、死を思ひ止まらう」と此處に荒太郎は、その場を去つて、東國へと赴きましたが、遂に此の人は、前に申しました如く、頼光公に仕ねて、四天王の一人と相成ります、序にお斷りを致して置きますが、前編に曰井粟太郎となつて居りました、これは碓氷荒太郎の間違でございますから、訂正致して置きます、さて荒太郎のお話はそれで擱め置きまして、前に戻りますが、かの臙丸の彌介でございまする……彌介は那須澤にて深雪を欺き溺死させ、かの百兩の金子を懐中に致して、西を望んで走りましたが、その日の夕暮に、大井の里大井川をもうち渡り、これより街道を行かずして西南の山を越ねました、即ち尾張路をさして山深く分入りましたが、山中にてバッタリ日を暮して了ふた「サア失策ふた、固より野宿は覺悟の前だが、さて斯る山中で日を暮すと困つたものだ、何處

かゝはあるまいか」と彼方此方を見廻しながら、歩いて居りまするとゝ、遙か彼方に火の光が見ねた「はゝア彼處に火が見ねるが、併し獵夫の焚火らしい、兎もあれ行つて道を尋ねやう」と頓て其の所に走りつきまするとゝ云ふと、果せるかな、一人の獵夫が木の葉を焚いて居るのでございます 彌介「モシ一寸お尋ねしますが、之れから村里までは餘程ありますか」尋ねると云ふと獵夫は彌介の姿を見て、怪みの眼をして居りましたが ○「村里までは、之れから程遠くもありませぬが、貴方は旅のお方ですか、彌介「左樣で、ツイ道を蹈迷ひまして……○「さうでせう併し此の山は、猛き獸物が栖んで、仇を致しますから、夜に入れば通ふ人はありませぬ、兎に角貴方は何方へ越しなさらうとも、其の儘では物騒でございます、獸は火を恐れますから、これを持てお出でなされ」言ひながら火繩に火をつけて渡して與れた彌介「左樣ですか、何うも御親切に有難う存じます、それでは御

免」と彌介は、火繩をうち振りつゝ、その場を立去りましたが其の途中にて思ふやう彌介「待てよ、かの獵夫、親切かは知らぬが、故もないに我に火繩を與へたこと、不審千萬である、ムウ用心に如くはなし、斯うして歩かうと、心づく事がありましたから、その火繩を竹杖の先に結びつけ、それをば横さまに遠く突出した、廻て道の程六七町も出たかと思ふ折しも、忽ち弦音高く聞ね、杖の眞中を丁を射ましたこと故、さてこそと彌介は身を轉して地上にドツと倒れたが、その儘死んだる容を致して居りました、すると彼の獵夫は仕すましたりと、しづ〳〵と歩み寄りましたが、彌介が倒れて居りますから、死んだるものと思ふたか、探り〳〵懷中に手を差入れ、財布を引出さんと致しますから、彌介は臥しながら腕をムンツと掴んが、エイヤツと云ふ聲諸共、もんどり打して投飛した、獵夫は彌介が上を躍り越ね、眞逆樣に倒れましたが、かれも癖者、ムツクリ起上ると

物をも言はず走り掛つた、さうはさせぬと彌介は、足を擧げると脇腹を、ハツタと蹴りました事ゆへ、何條堪りませうや、ウ……ンと云ふと、再びドウと倒れて了ふた　彌介「態を見よ」と彌介は之れを見返りもせず　彌介「エ、イ、暇取らせよつたわい」と塵うち拂ひ、ドン〳〵〳〵道を急いで、又も十町餘り走りまするとと云ふと、丁度其處に、殊に嶮しき崖道に、一軒の草の屋がございまする、その家の中に年頃二十歳許りなる若者、ブツヲリと肥にた力士めきたるが、蚊遣火を炊して居りますから彌介は此の家にて一宿を願をうと立寄つた　彌介「御免下さい、旅の者でございますが、斯る山中にて日を暮し、難澁致して居ります、憐れ一宿をお願ひ申したう存じまする」言ふと彼の若者

○「あゝ左樣でございますか、それは嘸かしお困りでございませう、お見掛の如き伏屋、お構ひなくば……」彌介「いや何處にても雨露を凌げば、結構でございまする　○「それでは此方へお上りなさいませ　彌介「有難う存じます」

まする」と足裝束を解いて、上にと上り、蚊遣火の傍に坐りましたが、かの若者は心の中で「はテ不思議、日暮れて、北より來る旅人は兄之れを殺し、南より來るものは、我れこれを殺して、一人も漏す事はない、然るに此の者、如何して此處へ來つたのであらう、兄は何うしたのであらう、ても怪しやな、されど此處へ來た上は、我々が網を脱るゝ事は出來ぬわい」と點頭いて居た、さて此の兄弟と云ふは何者でございませうや、愈々彌介が關の太郎兄弟を、己が手下に致さうと云ふ、續いては平井保昌と對面の一條、次の席にて申しあげまする。

第十席

彌介は家の樣子をつら〳〵見まするに、壁に一張の弓を掛け、柱には數多獸の皮が掛けてござまいするから、心の中で「ハ、ア獵夫の家かな……」と思ふて居りましたが、聽て二言三言話の後かの若者　○「斯くお泊め申しましたけれども、御覽の通り貧しき家でございますから、褒應すべきものもございません、たゞ野宿をなさるより少し勝つた計り、夏の夜は明け易うございますから、御勝手に彼處でお寢みなさいませ」言ふから彌介は、能き程に答へて、やがて反古張の唐紙にて搆ふたる一室に這入り、ゴロリと横に相成りましたが、何程大膽な彌介でも、さう寢付かれるものでございません、うつら〳〵と致して居りまするとゝ、暫らくして表の方へ人の來る足音がする、すると彼の若者の聲として　○「今宵は何故遲かつたのぢや」問ふと其の人が　△「いや、實は宵の程に十七八に致して、懷中に物ある旅人が、山を越して來たから、何日の通り斯樣々〳〵したけれど、

其奴思ひの外なる剛のもので、却つて生命を取られんとしたわい、恐ろし奴もあるものだ實は斯うぢや」と物語らうとするのを、かの若者ソツと袖を引いて、唐紙の方を指したから、その男はその儘默つて了ひましたが、後は小さい聲で何やら囁いて居る、所が此方は彌介、これをば漏聞きまして「はゝア、さては最前の獵夫の家にてあつたるか、よし〳〵、再び彼等を慈かして、旅寢の憂を晴して呉れやう」と膽太くも刀を取つて腰に帶し、唐紙を引明けんとした、此の時かの若者早くも燈火を吹消したから、眞闇がり、彌介はその暗がりの中を探り〳〵、兩人の間にムンヅと坐した彌介「あゝ、何うも餘りに蚤蚊が多くて、寢ね兼ねて居りましたが、御主人のお歸りと覺ゆれば、夜と共に語り明さうと起出でました」此の言葉に、切取を常とする二人も、勢ひを呑まれましたか、暫し回答も致さなかつたが、折しも吹來る風に、蚊遣火パツと燃上つた、主の男は彌介の顏を

眺めて吃驚仰天、忽ち若者に目配せするよと見ねましたが、やッ……と云ふ聲諸共、双方から組付いて來た彌介「エ、イ何をする、小癪な奴……」と彌介は、兩人が襟髪掴むと、右と左にハタと投付けた　○「チエッ口惜しい、弟、遣つて了へ」　△「合點心得た」と兩人は、起上りさま力を拔いて、向ふて來た彌介「猪口才千萬な、サア來い」と彌介は、右に變し左に支へ、飛鳥の如くに身を閃かしましたが、遂に兩人が刀をうち落して了ふた兩人はこれに怯む所を、足をあげて、ドン〳〵と蹴倒し彌介「ヤイ、奴等鼠の輩でありながら、尙も虎の髭を引かうと致すか、馬鹿もの ッ」と呶鳴りつけましたから、兩人は其の勇氣に恐れて了ふた、忽ち頭を垂れて手を支へ　△「何うも恐れ入りました吾々眼ありながら、斯る豪傑とも存じませず、手向ひ致しましたは愚かな至り、そも貴方は如何なるお方でございまするか、私は關の太郎と申し、之れなるは關の次郎と申す兄弟のもので

ございます」と言ふのを聞いて彌介は彌介「フ、ン左樣か、斯く云ふ我は、民間にて人と相成つたが、思ひ企つ旨もあれば、天下に横行せん爲に、此處に來つたのである、其の方は兄弟とやら、聊か見る所もあれば生命は助け遣はすぞ」と横柄に言放つた、これを聞いて兩人は尙更縮み上つた　太郎「有難う存じまする此の上は何卒お慈悲を以て、貴方の部下にお加へ下されたら存じます、彌介「ウム左樣か、然らば部下にも致して遣らうが、今同行する事は相成らぬ、我が望みは斯樣々々のもの、名前を揚ぐれば、夫れ聞いて來るやう太郎「ハ、、委細承りました彌介「それでは契約の印だ、これを與へるから……」と金十兩を與へましたから、兄弟はます〳〵喜びました、これより夜明けるまで行末の事共物語り、共に天下を横行せんことを約しまして、一先袂を分ちましたが、かくて彌介は此處に出立に及びまして、日ならず都へさして上り着きました、五條邊に宿を取つて、日

々浴中浴外を見物して廻りましたが、京の人と云ひまして、田舎者の目には、何事も美しく見ねまする、殊に遊君妓女の艶かなこと、目に見る所美を盡しましたこと故、彌介は忽ち魂を天外に飛ばして了ふた、そこで日毎に浮れ遊んで居りましたが、其の中に貯へ持つた金も遣ひ盡して了ふ、據ろないから夜な〳〵追剝を致して、財寶を掠め取つて居りましたが、早や秋も暮れて冬の初めと相成りました、所が或る日の事でございまする、彌介は稲荷山に登つて、楓の下に一人嘯いて居りまする折しも攝津守前司藤原保昌の内室和泉式部が、稲荷に參詣しやうと云ふので、田中明神の邊まで遣つて來ました、その時に俄かに雲間を過ぐる一時雨、パラ〳〵ッと降かゝつた、然るに式部には雨具の用意を致して居りませぬから、如何はしやうかと、暫し猶豫して居るのを、此方で見ました彌介は、パラ〳〵ッと式部の傍に駈來り彌介「御婦人、これをお召しなされて、御參詣にな

りますやう、お歸りまでには雨も止みませうから……」と云つて、己が着たる襖を脱いで差出した、式部は此の邊の童が我を知つて襖を貸して呉れたことだと思ひますから式部「それは御親切に有難う存じます、暫らく拜借を……」とこれを着て參詣を致しましたが、これぞ彌介が、和泉式部に懸想致しましたから の事、これが爲に彌介は遂に平井保昌に對面しやうと云ふ、愈々待歷保輔と改名の一件でございまする。

第十一席

さても和泉式部は何心なく、彌介の襖を借受けて、稲荷さんへ參詣を致しましたが、下向には雨も霽れましたから、即ち彌介に返し、頓て館に立歸つて了ひました、所が彌介でございます

る、瞬きもせず、和泉式部の姿を眺めて居りましたが、つく〳〵思ふやう「さて〳〵美しい女もあるものかな、我れ今日まで此の洛中の妓女に戯れて、天下の美人此の外にあるまいと思ふて居たが、今の上臈に比べたなれば、皆西施の門の狗である、金屋の内に粧ひ閉ぢ、鶏障の下に媚を深うする上臈は、心言葉も格別のものであるわい、形容して見れば、紅梅の色異なる空だきの、匂やかに酬れかゝる秋の波は、芙蓉の眸りに顕はれ、丹花の唇を開いては、鶯の初音囀るよりも、尚やさしげなる風情、嗣にかくとも及び難ない、世にあらん思ひ出、男と生れた甲斐には、錦繡の褥に臥して、今の上臈に腰をさすらせたならば、如何許り楽しい事であらう」と彌介は、心神恍惚といたして、魂を天外に飛して了ふた彌介「さても彼の上臈、何處のものであらう、此の邊で尋ねて見やう」と思ひました所から、其の邊なる家に立寄つて、かの上臈の事を問ひますると、その家の女房

が女房「あのお方でございますか、あれは摂津前司保昌さまの御内室で、和泉式部と仰有いまする、評判の美人でございまする、と詳しく物語つたから、彌介は聞いて、いよ〳〵心惑ひ彌介「成程、さるお方の御内室でございますか、して其の保昌主の館は何方でございます女房「ハイ、私は確とは存じませぬが、何でも醒が井の邊と聞いて居ります彌介「左様ですか、いや御面倒を致しました」と彌介は、詳しく聞終つて、其の場を立去りましたが、頑脳の犬は追へども去らず、菩提の鹿は招けど來らず、彌介は式部を一目見るより、其の姿が目の前にちらついて、何うしても去り難い、遂に彌介は、戀の奴隷と相成つた、夢路を辿る如く、只管醒が井をさして急ぎましたが、日のある中は、忍ぶに便ないと、途にて日を暮しました、最早彌介は情慾に驅られて「せめては今宵式部が寢室に忍び入り、我が心根を知らせたい」と思ひ立つたは図太い話でございます、館の周囲をうろ

と致しましたが、又思ふやう「待てよ、斯樣な姿をして這入つては、強盜と怪しまれる、憐れ烏帽子狩衣を着たる人が來つたならば、剝取つて我が裝ひを繕ひたいもの……」斯く考へました所から、足を廻らして、西の洞院高辻なる椽の木蔭に佇んで、人や來れと待構へて居りました、斯る折しも次第に近く閑ゆる笛の音、素破こそと彌介は、月の明に透し見ますれば、朽葉色の狩衣に、黃金作の太刀を佩きました武士、月明に乘じて只一人、笛吹いて練來る樣子でございまする、此の人こそ別人ならず、能く繪草子に書いてございまするが、これぞ攝津前司平井保昌でございまする、斯る人とは知らぬ彌介「よきもの御參なれ」と遣過して置いて走り掛り、其の衣を剝がんと思ひましたが、何だか氣遲れがして物恐ろしく覺ゆる、そこで二三町遲れて、後から蹤いて行きましたが、相變らず餘念もなく笛を吹いて行く、彌介は心の中で「さて〳〵天晴れなる大丈夫か

な、いで成して試みん」と足音高く走り掛りまする、笛を吹きながら見送るさま、取掛るべき隙もない、彌介は氣遲れがして、また後の方へ走せ退きましたが「チエッ殘念……」と又走り掛つたが同じ事、斯樣なこと幾度も致しましたが、更に驅ぎたる氣色がございませんから、彌介は何となく心臆し、また十町許りも蹤いて參つた、此處に於て彌介は彌介「チ、イ、何時まで斯くてあらんも、本意ない事だ、此の上は……」とズラリ一刀を引拔いて走り掛る、此の時保昌は始めて笛の音を止めて振返り保昌「其の方は何ものぞ」問はれて流石に不敵の彌介も、心おくれて刀を躊しまするとも保昌「コリヤ、其の方は何者ぞ」と又問掛けた、彌介も今は逃るとも逃さじと思ひました事ゆへ彌介「ハイ、追剝にございまする」と答へた、保昌はつら〳〵彌介の顏をうち守り保昌「怪しげに稀有の奴かな、我と共に來よかし」と云ひ掛けて、また初めの如く、笛を吹いて行く、彌介も稀有

の思ひを致しましたから「ハテ何人であらうな」と共に醒が井まで行きますると、前に保いたる保昌の館に這入りますから「さては此の人が、攝津前司であるのか」と門の扉の蔭に居りますると、保昌は再び見返つて保昌「やよ若者、聞くべき事があれば内らに這入れ」と呼入れた、彌介は不審に思ひましたが、言はるゝ儘に、奥深く這入りまする と、曹院の次の間に座を定めました保昌「コリヤ、其の方は都に見馴れぬ態であるが、父の名は何と云ふぞ」問はれて彌介は「彌介「ハイ、我が身には父もなく母もございませぬが、三歳の年とやらんに、此の刀をつけて木曾の山家に捨てられ、商人の家に人と相成りましたが、名は彌介と申しまする」と答へると、保昌はニッコとうち笑ひ保昌「實にさる事であらう、その刀を我に見せい」言はれて彌介は辭み難く、保昌の前にさし置きましたが、茲に圖らずも義兄弟の對面と云ふ、彌介改めて平井左京亮保輔と名乘るより、不義に

も和泉式部に横戀慕をしやうと云ふ一席、追々面白く相成つて參りまする。

第十二席

彌介が差出した刀を、保昌取つてつくづと見て居りましたが また彌介の顔を暫時うち守り保昌「ム、、其の方は我が義弟麿丸であらう、其の方は知らぬであらうが、その方が母節折と云ひしもの、懐妊して二月の時、我が父致忠の妾となり、其の方を產落したが、皆に黒症あるを以て、雲月を吐くに似たりとあつて、麿丸と名付けられた、然るに養ひ難き故あつて、其の方が三歳の折、節折と共に上野國に遣はした、其の時は我れ十歳にてあつたから、其の方が稚顔は今に忘れぬ、其の故は斯樣々々

である」と事落もなく物語り、又言葉をついで父の遺命を以て彌介を撰れむ事などを言聞せましたから、彌介は始めて身の素性を知り、大いに感きましたが、その喜びは言葉にも盡されません、彌介は物をも言はで、保昌を拜して居りました、さて保昌は、元來孝心深い人でございますから、父の命を守り、彌介を骨肉の弟の如く思ひなし、茲に一字を授けて、左京亮保輔と名乘らせました、されば彌介、今は名家の弟と敬はれ、暫らく學びの窓に書を讀むとは雖も、固より身を修むべき覺悟はございません、放蕩を事とし華奢を盡して常に着する袴は、取分け裾を長く引きましたから、世の人は袴垂保輔と呼ぶやうに相成りました、依つて後には之れを本名のやうに致して了ひましたが、さても彌介改め保輔でございまする、義兄保昌の惠みを得て、圖らずも武門の一族に列つたる事でございますから、早く虎狼の心を轉じて、忠孝の道にも這入るべきでございますが

然るに左はなくして、ますく貪慾を專らとし、また樂に兄嫁和泉式部に懸想してより、露忘るゝ暇とてはございません、折がなければ言寄らんと、思ふて居りましたが、此の家は、男女の禮義嚴しく致して、然るべき便りもない、殊更保昌は、所謂威あつて猛からずと云ふ、溫厚の君子でございますから、何んとなく後めたく、徒らに過して居りましたが、此處に齋明と云ふものがございます、これは保昌が兄齋光の子でございまして今年十五歳に相成りまするが、父にも叔父にも似ず、放蕩懶惰に致して、物事を勤めない、それゆへ保昌は度々教訓を致しまするが、更にこれを用ひない、だん〳〵自惰落に身を持崩すから、保昌は大いに之れを苦にして居りましたが、然るに同氣相求むるの倣ひで、保輔とは餘く意が合ふ、遂に心も證かす何事も陸み語ふやうに相成つた、そこで保輔は、これに合圖を賴んで居つた所が、或る日の事でございまする、齋明は忙はしく走

來り　齋明「保輔どの、今日は叔父も外出を致して、まだ歸つて來ませぬ、式部どのは今南座敷に在すから……」と和語いたから

保輔「左樣か、それは辱けない、能く知せて呉れた」と大いに喜んだ、其處から保輔は、俄かに衣紋をかき合せつゝ、其の所に行つて見ますると、式部は今しも椽端に出て、庭をうち眺めて居りますから、時こそ宜けれと、其の邊に進み寄つた保輔「姉上何をなされてお在でゝございます」此の聲に式部は式部「おや保輔主、何時の程にお出でになりました」と打驚いたる態、忽ちその塲を立去らんと致しましたから保輔はその袖を控へ、保輔「姉上、お願ひに罷り出ました式部「ハテ、お願ひとは……保輔「私ちと歌の道を心掛けて居りますれども、まだ師匠もございませぬ、姉上は世に許せる歌よみに在せば、此の腰折をなをして給はりまするやう」と差出した短冊式部「何かと思へば、お歌でございまするか、拜見致します」と式部は、何心なく其の短冊を手に取つて見ますれば、

時雨する稲荷の山の紅葉ばは
あをかりしより思ひそめてき

と詠じたる戀歌でございする、式部はサッと顏の色を變ゝて驚いた、と云ふのは「さては去年の時雨月、稲荷山にて妾に袂を貸したる人は、此の人であつたか」と始めて悟つたから……其處で式部は、ッッと短冊を投返して立たんとしたるすると保輔に於ては、最早前後の辨へもない、早くも刀の鐺を容いて、裳を止め保輔「あれ姉上、歌の善惡は兎もあれ、一言の回答もなくつて此處を立ち給ふとは、情ない事にございまする、此の返し事なくば、何地へも遣り申しませぬ」と手辛き言葉、所が式部は驅いだる氣色もなく式部「保輔主、敷島の道は誠を以て根と致しますとかや、斯く道に背いたる歌の返しは、いまだ詠みも習はすございます、賢き人に問ひなされませ」と飽くまで辱し

められて、保輔は最早色も穏もさめ果てた、怒忽ち心頭より發して保輔「姉上、今一言仰せあれ」と刀を拔いて、詰寄つた式部「あれ、輔保主、無法な事をなされますな　輔保「何が無法、私を辱しめなさるこそ無法でございませう　式部「辱しめは致しませぬ、御免なされませ」と其の場を立去らうとする、保輔は最早これまでなりと保輔「姉上、覺悟……」と云ふが否や、走り掛らんとした、憐れ式部の生命は風前の燈火、此の場の始末、如何相成りまするや、一寸一服致しまして次席に……。

席十三　席

さて袋垂保輔は今や刀を拔いて走り掛らんとする折しも、今年七歳に相成りました小式部は、最前より物陰に立聞きしてありましたが、母紀の既に危きを見て、障子押開け走り出でました小式「母さま、只今父さまが歸られてございます」言ふ聲に保輔は、これに驚いて走り退く、その隙に式部も奥に紛れ入りましたが、此の時小式部がなかつたなれば、式部は忽ち保輔の刃に一命を失ふ所であつたのでございます、然るを頓智の一句に、母の急難を救ふたと云ふは、有難い才女でございまする……、さて其の後式部は、此の事夫に告げたなれば、如何なる珍事出來せんかと、ひめて置きました、併し心中にあれば、色外に顯はるゝとかや、兎に角胸安からぬから顏色も常ならぬ、これを眺めた保昌は、不審に思ひまして、或る日の事小式部に向ひ、保昌「小式部や、此の頃母の顏色が惡いが、何うか致したのか」尋ねると小式部は返答もせず、床にありました料紙を取つて、すら〳〵と書認めましたが　小式「父さま、これを御覽下さいませ」と云つて差出した、保昌これを押開いて見ますれば、一首の歌

でございまする

我が宿の栂の枝による椒みの
刺をばなどて伐透さゝる

此の歌心ありげに見ねましたから保昌は、しばゝうち吟じて考へた保昌「ハテナ、我が宿の栂の枝による椒の、刺をばなどて伐透さゝる……、ハヽン解つた、栂の木扁を去れば母ぢや、また椒の木扁を去らば叔ぢや、されば栂の枝による椒みとは、保輔が式部に懸想した事を言ふたものであらう、また椒の刺をばなどて伐透さゝるとは、斯る奸邪なる叔父をば、何とて早く遠ざけ給はぬか、それ故母の心が安からず、顔色が悪いのぢやと云つたものであらう」「さて〳〵小式部の俊才、驚くの外はない」と歌の意を悟つて保昌は、小式部が俊才に驚きましたが、また保輔が奸邪なるを憤りました、併し事を荒立てゝはならぬと思ひます事ゆへ、此の日は何事もなくて過しましたが、稍日数經

ちました時、保輔を傍近く招きました保昌「保輔近う」保輔「はい」保輔は此の間の事もがと思ふので、針の莚に坐するが如き心地保輔「外でもないが、近頃御身が爲に、別業の地を求め置いた、その家は姉が小路の南高倉の東にある、近きに日を撰み、彼處に移り住みなさるやう」思ひの外の言葉に保輔は保輔「ハヽ、何事かと存じますれば、家を賜はりまする段、誠に喜ばしく存じまする」とお禮を述べて、その席を立ちましたが、後にてつら〳〵思ふやう「さては此の程の事を式部が告げたのであらう、それ故我に家を與へて遠ざける工夫に相違ない」と察したから忽ち惡心萌して「汝れ、戀の叶はぬ遺恨晴し、此の上は今宵式部を刺殺して、此の地を立去らうか……」と思ひましたが「い〳〵、今女を殺すとも、我に於て益はない、若し一度志氣を得たらんには、彼を旋けんも亦難くはあるまい」と思ひ返したので、さあらぬ体で、高倉の別荘へ引移りました、サア斯うな

ると云ふと保輔、固より勃むべき業もない、また忌憚かる方もございませんから、ます〳〵殘暴を恣まゝにして、都下の惡黨を引入れ、淫酒賭博に日を送つて居た、そこで之れを聞いて、關の太郎兄弟も上つて來る、また近國の惡者を集めた所が、此處彼處から夥しく集つて、今は猛嘗君が三千の客にも劣らぬ有樣と相成りました、併し固より之れを扶持すべき祿とてあるのでございませんから、皆々夜は追剝辻斬をなさしめて居た、而して保輔は、其の取得たる財物の多少に依つて、或は賞し或は罰し、其の身は自若として、平生金衣玉食に飽いて居た、それから家の奥には藏を造つて、下を深く井のやうに掘り、何にゝても欲しいものは十分に買取り、代金を拂ふから此方へ來て呉れ」と奥の藏の中に伴れて行き、皆かの穴の中へ突落して殺して了ふた、それ故保輔の館へ、品物を持つて行つたものは、一人として返るものはございませんから、此の事怪しく思ひます

るけれども、證據手掛りもないから、疑ひ思ふのみでありました、併し追々此の評判が立ちますから、遂に保昌の耳にも入りました、固より保昌に於ては保輔が斯許りの事をするとは知らでありましたが、何とやらん世の人口の耳に止る事もあります

保昌「齊明、其の方保輔がり尋ねて、至急に相談致したい事があると、連れて參れ」と齊明を遣はした、所が齊明は、元來放蕩もの、保輔とは同志でございますから、忽ら保輔に說付けられて、終にそのまゝ歸つて來ない、同類となつて了ふたのでございますが、此の齊明、他の輩らか各々手柄の多少により、恩賞を受くるのを見て、我も何かな功名をしたいものと思ひ、或る日の事、西の巷を徘徊して居りますると、或る家の前に、黑白斑の犬が一匹繫ひである、夫れをば齊明、心中大いに計る所があるから齊明「あゝ良い太ちやな、可愛い顏をして居る、プチ〳〵、チンをして見い、ム、良い犬ちや」云ふのを此の家の主

が見て　○「モシ、貴方は犬がお好きでございますか」齊明「あゝ貴方のお犬ですか、大層良い犬をお飼ひになります、私は至つて犬好きで……　○「左樣でございませう先程から左樣にお見受け致しました、何うでございます、若しお氣に入りましたら、私の家にはモウ入らぬ犬でございますから、お讓り申しますが……」齊明は喜んだ態をして　齊明「お讓り下さいますか、それは辱けない、ではお讓りを願ひます」と云ふので、此處に代價を約束して　齊明「只今持合せがありませぬから、何方か私の宅へ……」　○「承りました」そつから其の家の手代が犬を牽いて、齊明と共に出立ちましたが、此處に呉服屋に入つて詐僞を働かうと云ふ、續いて保輔がいよ〳〵江州高島に岩屋を築かうといふお話に移ります。

第十四席

齊明固より計る所があるから、呉服屋の表に來つた時手代に向ひ齊明「あゝ手代どの、拙者少し買物があるから、暫らく此處に待つて居て下さい」云ひながら呉服屋に這入つた、斯くて齊明は錦織物を數々かれこれを出させ後齊明「兎に角此の品は、奥機のお求めになるに依り、一寸お見せ申したい、就ては供の者をこれに差置きますから、暫時お貸し下されたい」云ふに此の家の者も、犬を牽いて居る供が居りますこと故　○「ヘイ宜しうございますとも、お持歸りを……」と仔細あるまじく思ふたから、品物を渡した、齊明はそれを抱へると、フイと何處へか隱れて了つた、所が呉服屋の方では、待てども〳〵來ないから、

犬を率いた供に掛合ふたが、固より知らう筈はないから、家は存じませぬと云ふ　○「汝れ不屈きな奴、知らぬと云ふ事があるか、さては許偽の同類であらう」と云ふので、皆な寄て集つて打擲に及びましたが、全く知らんのでございますから是非がない、却つて膏薬代一兩を出して、事濟と相成つた、誠に詰らぬ話……

さて又齊明はまんまと品物を詐つて歸つて來た、保輔を初め同類の居る前で、鼻たかく〳〵と斯く〳〵の次第を告げたれも皆、成程旨く計つた、妙計々々」と賞する中に、保輔だけはこれを賞めない　保輔「一同のもの、齊明の計る所、妙は妙だが、棟梁の才ではない、我れは既に今宵、數萬金を盗み取る謀計を設け置いた、其方等斯樣々々致せ」と指示した、皆々大いに感心をした「成程、流石は御大將の妙計は違ひまする」と云つて居たが、其の夜四更の頃に相成つて同類共「ヤア盗人、強盗が這入つた、出合へ〳〵」と大きな聲で呼はつた、而して周

章たる樣にて、屋敷の中俄かに騒々しく、チヤン〳〵チヤリンといふ太刀音、追つ返しつ戰ふ樣子を示したから、四邊物靜かな眞夜中、此の騒動が隣近所へ響き渡つた、すると此處に武藏介藤原善時といふ人がございます、誠に金滿家でありまするがこれが保輔の家とは、確かに百間許り隔つて居る、善時は其の人聲の騒がしいのに、何事であらうと、人を走らせて見に遣ると云ふと、保輔が家に賊が這入つて、今戰ひの最中だと云ふから、近所の事なり武勇ある人でございますから善時「そりや捨置相成らぬ、者共用意に及べッ」と云ふ、善時は早速馬に飛乘ると、數十人を引連れて、保輔の屋敷へさして遣つて來た、所が太刀音は烈しく聞ゆるが、門は堅く閉してあるから、善時は大聲に「保輔どの、善時加勢として向ふたり、御門を開き候へ」と呼はつたが、たいチヤン〳〵チヤリンと打合ふ音許りして、更に答へもない、それ故稍暫らく門前にありましたが、程

過ぎて關の太郎門を開き、太郎「賊は最早逃去りましたが、御加勢の段有難く存じまする、先づ此方へ……」と善時を奥へ請じて厚く禮を述べ、太郎「さて又折惡しく今日は、保輔不在にて斯くの次第でございまする」と態とさま〳〵時刻を延した、さて明方に相成つて善時、我が家に歸つて見ますれば、座は如何に、家内一同は縛せられ、門番は二人まで切殺されて居る、さうして奥藏の金は四萬兩餘盜まれて居る、善時は餘りの事に茫然と致して居りましたが、腕を組んでつく〳〵と考へた善時「さて〳〵不思議なことぢや、保輔が宅に押入つた强盜、追出された後に此處へ來つたものか、何うも合點が行かぬ、兎もあれ保輔の家に行き、樣子を窺はさせて見やう」と人を遣はして見ますなに明家になつて人は一人も居りませぬと注進して來た、善時これを聞いて善時「チエッ殘念、さては保輔に謀られたか……」と大いに憤り、此の事お上へお屆けに及びましたが、此方は保輔、

まんまと事を仕終せて、數多の金を搶はせ、三條河原に引退いて、此處で同勢揃ふを待つて居ります所へ、家に殘した者共も一時に集り會しましたから、これより江川高島に赴き、要害の地を撰んで、城を築かうと云ふので、先づ齊明に金を持せて、かの地に赴かしめ、保輔はまた其の夜關の次郎と、小盜人五七人を率ゐて、浪華の方へと旅立を致しましたが、それより諸國を廻つて、鬼同丸や相馬太郎良門、或は茨木童子等と義を結び保輔は江州高島を根城とし、常に天下を横行した、そのお物語は既に前編に申しあげましたから、此處に再び申しあげませぬが、その後は高島に立歸つて、數多の手下と共に、いよ〳〵憚る色もない、近國隣村を劫掠かし、美麗なる女を見れば誘拐し、これを妾とする、其の殘暴なる事大方でございませぬから此の事終に都へ聞ねましたので、朝廷では賊徒退治の軍勢を差向けやうと、いろ〳〵御評議に相成りましたが、これを聞いた

る平井保昌は「己れ所縁の者たれば、是非共之れを取挫がんければ相成らぬが、座は謀計を以て搦め捕るより外はない」とむつて、日毎に工風をば廻らしました、いよ〳〵保昌が高島の衆賊を討つと云ふ、追々大江山の鬼退治に移つて参ります。

第十五席

然るに或る夜怪しの一人の曲者、松の梢に忍び居るさま、保昌これを見定めましたこと故、手裏劍を以て丁と打つた、曲者は肘を破られ、忽ちドウと落つるのを、走掛つて厳しく縛め、事の由を貴問ふと、苦痛に堪へ兼ねて、彼の曲者曲者「私は高島の忍びのものでございますが、首領保輔の謀計に依つて、和泉式部を奪はんため、依て同類三十餘人、宵より築垣の外に隠れ居

て、其の合圖を待つて居るのでございます」と詳細に白状致しましたから保昌は喜んで、俄かに家臣を呼集めて謀計を傳へ、また物馴れたる郎黨に、かの賊の衣裳を着せて、斯様々々致せよと差示した、心得ました郎黨は、軈て塀の上に跨り、合圖の笛を吹鳴したから、同類三十餘人は垣蔭より、乗物を擔いで出で、やア兄哥、旨い事行つたな」と進む所を、保昌の伏勢一度に起つて、一人も漏さず生捕つて了ふた保昌「うむ、者共、悉く衣裳を剝いで、殘らず首を刎ねて了へ家來「承りました保昌「斯りや、其の方はこれより斯様々々に致せ」と最初の賊に命じたから、賊は一議に及ばず其の謀計に從つた、保昌はまた下知して、三十餘人の賊の衣裳を、我が郎黨に着せ、別に三十人の士卒に謀計は授けて、徑より高島に進ませましたが、件の乗物には、火器弓矢を入れて士卒に擔がせ、その身も同じ扮裝にて、皮り賊を道案内と致しました、軈て高島に着きまするとと、門を

荒らかに打敲き「式部を奪ひ歸りましたぞ、早く門をお開き下さい」と呼はつた、此の騒聞いて關の次郎、物見の窓から見ますれば、疑ひもなく同類でございますから、急ぎ門を開かせると云ふと、保昌を初め三十餘人、城中に入ると齊しく、ワア……といふ鯨波を作つて、拔連れて切つて廻つた、素破欺かれたかと、衆賊の驚きは一方でございません「やア夜討だ〳〵夫れッ弓よ槍よと、慌てふためき繫げる馬に鞭を當て、弦なき弓に箭を挾み、右往左往に亂れ騒ぎましたが、固より烏合の衆、一支へもない、我れ先にと逃走り、路なき方に追詰められて、後の谷に陷つて死する者は、數知れませぬ、寄手は益々勇を奮ひ、早や城に火を掛けました事ゆへ、關の次郎切つて出で、二尺八寸の大太刀を直向に振翳すと、保昌討たんと向ふて來た、保昌ヒラリと受流し、十合餘り戰ふたり、その隙に保輔、齊時も縱横に切つて出でましたから、寄手の士卒は、それ遁すなと二人を取圍んで挑み合ふ、此時關の次郎は、已に數箇所の傷を負ひ盲打に斬つて來ると、保昌丁と受止めて、一聲おめいて討つよと見ねましたが、次郎が身体は眞二つに相成つて了ふた、此方は齊明、一方を切拔けて落行く所を、豫て徑に伏せ置きました士卒が、難なく之れを搦め取つて了ふ、所が保輔は尙も蹈止つて戰ふて居りましたが保昌「ヤア〳〵保輔、恩義を忘れたる人非人、保昌が手にかゝつて降伏致せ」と呼はつて、半弓グッと引絞り、颯と放つた、此の强弓何として受けられやう、胸板ブッと射拔かれたと思ふたが、怪むべし保輔が形は、風に煙の消るが如く、行方も知れず相成つて了ひました、これぞ習ひ覺えた妖術でありまするが、此方は保昌、保輔の行方を探したが、更に解りませぬから據ろない、寨中に奪はれ來て居りまする美女共を、皆々故郷へ送り屆け、討取りました所の首百餘級を、都に上せて、事の由を奏聞に及びました、其處で主上御感斜め

ならず、保昌を正四位下に補せられて、その功を賞せられましたが、それはさて置き保輔は、高島を落延びて比叡山を越ね、赤山の邊乾の谷に住居を致す市野鬼同丸の許へ出て來ました、而して此處に暫らく隱れて、時を計つて再び都へ押出さうと、種々工夫をば廻らしましたが、此の事都の方に於ても、源頼光公を初め四天王の面々に勅命が下りまして、何うしても衆賊を退治致さんければ相成らぬと云ふので、いろ〳〵苦辛を致して居られました、然るに或る日の事、頼光公俄かに發熱致されたウン〳〵唸つて居られるから、四天王の渡邊源次綱、卜部六郎李武、阪田公時、碓水貞光を初め、家臣一同は、皆盡夜怠らず看病を致しましたが、日毎に病重り行く許り、それ故一同は心配して、陰陽表裏を考へ、良藥を撰んで調しますれども、熱氣は更に醒めない、斯の如きこと三十日餘、少し怠り給ふたやうに相見ましたから、その夜四天王及び看病人は、皆暇を賜は

つた、そこで各々遠侍ひに退いて、休息を致して居りましたが頼光公は一人寢もやらず在すと、あら不思議、燈火の蔭に人が立つて居る頼光「その方は誰そ、何者ぢや」問はれて彼のもの、

○「いや憚りなきものにございまする、お心地は如何に在しまする頼光「むゝ、心地は日に增しく惱しく覺ゆるが、其方はついぞ見た事がない、何者ぢや」此の時かの者ずる〳〵と歩み寄り

○「さこそございませう、そは此の鬼同丸が仕業でござる」と云ふが否や、三條四筋の綱を投掛け、搦め取らんとする氣配、頼光「むゝ、さては聞及ぶ鬼同丸とな……」と云ふ聲の下、頼光公はガバとはね起き給ひ、枕邊にありました、膝丸を拔いて、ハッシと切付けられた、確かに手應ねあつたと思ひましたが、姿はパッと消ねて了つた、所が此の太刀音に驚いて、四天王の勇士は駆け走り出で、我が君には、何事か在する」と問ひ奉つると頼光「むゝ、實は斯樣々々の事ぢや」との話、此の時平井保

昌も居合せましたか、手燭を乘つて席上を見ますれば、血が夥多しく溢れて居るから保昌各々、さては鬼同丸に切付け給ふたに疑ひない、いざ此の血を栞に、かれが棲家を尋ね行き、撃殺して捨てやう」云ふ言葉に、オ、と答へて、四天王皆諸共に松明をともし連れ、其の血を慕ふて參りましたが、愈々此處に鬼同丸退治の一條、次の席に讓つて申しあげまする。

第十六席

これを俗説に傳へて居る所に據りまするに、四天王を初め皆諸共に、その血を慕ふて行くと云ふと、北野の神社の後に、大いなる塚がある、其の所にて血の跡が止つて居る、すると其の塚の下にて、物の喰く聲がするから「さては此處ぢや〳〵、疾く堀

毀てい」と云ふに手に〳〵塚の石を投退け〳〵見ますれば、四五尺底に至つて、株の如きものが現はれ出でた、これを眺めた阪田公時、公時「妙なものがある、いで引出して呉れん」と手を掛けましたが、これぞ鬼同丸が腕であつた、鬼同丸は既の痛手を受けて、苦痛に堪ねないが、今は脱るゝ事出來ぬから、引出されまいと後逐りをする、公時「オ、動くぞ〳〵、是れなん曲者に相違ない」と滿身に力を入れて、引出さうとする、此處に互に引合ひましたが、公時が奮然として引抜いて了つた、其の拍子に公時は、力餘つて後にドッと轉んで此方は鬼同丸、最早叶はぬと思ふたか、塚の中からパッと走り出る、既に飛掛らんとするのを、網、季武の兩人が右より支へ、保昌、貞光の兩人は左より組留めた、其の間に公時は身を起し、鬼同丸が胸前を柄も通れと刺貫いた、これに撓む所を四人の勇士、刀を抜いて左右より刺す程に、盤石を轉ばす如き音

して倒れて了ふた、其處で火を照して見ると云ふと、鬼同丸が形狀は初めにも似ず、大いさ鈴程の土蜘蛛になつて居る、これを眺めて一同は大いに驚きましたが、平井保昌口を開いて、

保昌「誠や去ぬる年、阿部時明が、獸にもあらず禽にもあらず、毒虫の精なりと云はれたが、果して鬼同丸は、蜘蛛の妖けたるにてありけるか」と云つたので、一同はこれに繩をかけ、頼光公の御館へ引來つた、さて頼光公に見せ奉ると云ふと、頼光公は殘念なる面持ち頼光「むゝさては斯許りのものに、屢々誑られ三十餘日も惱みしこそ安からぬ、夜も明けなば大路に曝せよかし」とあつて、次の日鐵の串に貫いて、河原に立て置きましたが、これを見るもの皆舌を卷いて驚き、且つ惝れぬものとてはございませぬ、かくて頼光公の病氣も、頓に平癒と相成りましたが、これより彼の膝丸の名劔を改めて、蜘蛛切太刀と名付けられました、斯う云ふ傳說でございますが、まさか蜘蛛でご

いますまい、その昔土の中に穴を掘つて、住んで居りましたものを土蜘蛛と呼びました故、それと同じで、鬼同丸も岩窟の中に潛んで居つたからでございませう、兎に角市野鬼同丸は、此處に退治られて了ひました……さてお話變りまして、袴垂保輔は、鬼同丸殺されたと聞いて、源家の武威に憚り、伊賀、伊勢の間に身を潛めて、あれども無きが如く有樣にて、數多の年月を過しました、尤も此の間に相馬太郎も、大江山に岩屋を搆へる事になり、暫らく世の動靜を見て居りましたが、保輔に於ては心の中で、今は都へ忍び上つても差支へあるまい、いで四天王共の眠を覺させ、年來の鬱憤を晴して呉れやう」と思ひましたこと故、關の太郎以下三十餘人を驅催し、伊賀を起つて都に走せ上りました、サア泥棒が斯う入込んでは堪つたものでございます、まい保輔を初め三十餘人が、此處彼處に忍び入り、或は宮める家に打入り、又は道行く人を殺すなど、心の儘に振舞

ひましたこと故、兩三年靜かであつた洛中も、又物騷がしく相成つた、それ故役人等は、これ畢竟袴垂保輔一味のものと相違ないと思ひますから、保輔等を搦め捕らんと致しまするが、彼等は遁ぐるに妙を得て居るもの、如何とも詮術がない、そこで札の辻に斯う云ふ高札を建てました。

保輔を捕へ來るものあらば、賞錢百貫文を賜ふべし

斯くして觸れまするを、不思議なるかな其の次の日、早くも保輔を搦め來つて、賞錢を乞ふものがある、見ると全く袴垂に相違ございませぬから、四獄司はこれを受取つて、定めの如くその賞錢を取らせ、保輔を嚴しく獄舍に繫いで置く、所が不寢の番もついて居るに、繩をも觸かず夜の中に、何地ともなく逃失せて了ふ、かくの如くする事三度に及びましたから「さては保輔、賞錢を奪はん爲めに同類に命じて我が身を縛らせ、術を以て獄を脱れ出づるのであらう」と心付き、此の由奏聞に及びま

した、其處で朝廷では御評議に相成りまして、此の上は源家の武威によらずんば、退治致し難いとあつて、頼光公に保輔追討の宣下がありました、依て頼光公は急ぎ四天王を召集へ、密かに謀計を授けて、一人宛代るゝ〳〵洛中を探らせる事に相成りましたが、お話し一轉……、此處に龜山の麓に慈心寺といふ尼寺がある、住持の尼は年齡已に六十に餘つて居りましたが、然るに此の寺の本尊千手觀世音、或る夜忽然と失せ給ひましたから、大いに驚き、こは何人の盜みたるものかと、疑ひ惑る所に、二三日過ぎてかの觀世音自ら返り給ふて、本堂に在しましたからこは不思議なる事かなと、ます〳〵怪み驚ぐ程に、風聞洛中に滿ち〳〵て「慈心寺の本尊は活苦薩ぢや、夜な〳〵出歩きなさるげな」と云ひ傳へ語り傳へましたことゆゑ、サア參詣の貴賤老若男女、蟻の如くに群りました、門前は終日市をなす有樣所が此處に不思議なるは、投げました所の賽錢、たま〳〵觀世

音の御手に觸るゝ時は、自ら此の錢を取つて放ち給はない、斯る奇特を見て老若男女、瑞喜の涙を流し、日毎袋錢山の如く積上つた、されば世界の財寶は、悉く此の御寺に集るかと思はれました、其處で之れをば聞いて袴垂保輔が、慈心寺へ亂入しやうと云ふ、抑もこれが身の破滅と相成る一條でございまする。

第十七席

時はこれ六月十八日の夜でございまする、袴垂保輔は、三十餘人の同類を引連れて、慈心寺へ亂れ入りました、先づ比丘尼五人をひし〳〵と縛め、口に猿轡をかけ、庫裏の柱へ繋ぎました、保輔に於ては、會釋もなく住持の居間に這入りました、此の時齋佛尼は未だ寢もやらず、一人燈火の下に經を讀んで居り

ましたが、靜かに保輔を見返り、自若として經を卷納めた尼「コレ、其方は何者なれば、案内もなく漫に此の所へ來りぬるぞ」言ふ其の狀を嚴然として、威が高い、流石の保輔も心臆して進み得ない「されど此の尼何程の事をかなさんや」と再び内に入り、その傍らにムンヅと座した保輔「コレ尼、我れはこれ袴垂保輔である、此の寺には近頃數多の金錢を預け置いてあるから、それを持て行かん爲に出て來た、サア金を出せい」と云ったが尼は之れを聞いて、いよ〳〵騷ぐ氣色もない　尼「これは異な事を言ふ、尼は人に物を預つたる覺へはない、先づ其の譯を話しなされ」保輔はから〳〵と打笑ひ　保輔「尼、其の方は何故預からぬと云ふとも、此の寺の本尊を流行せ、金錢を集めたるは、皆我がなせし業であるぞ、其の故は、我れ本尊を盜み出し、觀音の手を磁石にて造り換へ、再び本に返した、それ故求ずして財寶集つたのである、されば此の寺の金錢は我が物である、我が

物を持て行くに、誰が咎むるものあらうぞ」言ふと嘗佛尼は嘲笑ひ

尼「愚かな事を言はるゝな、夫れ寶は世界の貨に致して、一人の財でない、其の方奸計を以て衆生を欺くとも、衆生は只佛の尊きを知つて、其の方が奸計を知らぬ、財寶は卽心卽佛の布施物に致して、尼が物ならぬ財寶を、其の方に與ふるの理があらうや、其の方早く歸れ、夜が明けたなれば、人に捕へらるゝぞサア〳〵早く……」其の言葉爽かに致して、水の流るゝ如くでございますから、保輔再び口を開く事出來ぬ、暫らく思案を致して居りましたが、何に思ひけん、直ちに走り去りましたから、同類も深く怪みながら後に從ひ、門外に退いた、此の体に關の太郎は堪へ兼ねて、保輔が袖を引き、

太郎「お首領、斯樣な老惡の尼一人でございませんか、夫れに一物をも盗み得ず、斯く慌だしう遁げなさるとは何事でございまする」言ふと保輔は聲を低うして保輔「いや太郎、我れ三十年來

賊をして居るけれども、此の寺に這入つた程恂しいと思つた事はない、かの尼は凡人でるないぞ、早く立去れ」其處で誰追ふものもないけれども、皆散々に遁失せて了ふた……此方は嘗佛尼でございます、同宿の尼の縛められて居るのを、一々解いて助けました、其の中に一人さめ〴〵と泣いて居る尼があります、不思議に思ひ、尼「其方何故泣いて居なさる、譯があらう、話して御覽」問はれてから尼云ふやう

○「はい、今立去りました强盗袴垂とやらは、我が子の彌介でございまする、あれは昔娘深雪と共に、那須澤川に身を沈めたと思ふて居りましたが、今存命へてあるを見ますれば、深雪を殺して遁去り、遂に强盗になつたものに相違ございませぬ、皆これ惡業の深き故と知りながら、流石に昔忍ばれて、問はるゝ身こそつらうございまする」と云ひも終らず、ヨ、と許りに泣伏しました、嘗佛尼も徐ろに哀れを催しましたが、また過去の因果を說いて悟し

ました事ゆへ、かれも亦喜んで、佛道堅固の道心と相成うたといふ事でございます……、さては保輔に於ては、畜佛尼に論破せられて、豫ての謀計も、徒ら事と相成り、すご〳〵と逃去りましたが、尚殘り惜くあつたか、其の夜前關白忠義公の嫡男、中納言顯光卿の御館なる堀川院へ亂れ入りました、折しも顯光卿は御參内になつて居りまして、御留守でございましたから、防ぎ戰ふものもない、青侍どもは御臺所を伴ひ參らせて、裏門より遁去りましたこと故、衆賊は恣まゝに亂入して、重器財寶を掠め取り、ドシ〳〵運び去らうとする、これを眺めて保輔は暫時と押止め保輔「コレ〳〵者共待てッ、盜みして一生を樂むもの、生命は固より無いものと覺悟致して居るから、敢て恐るゝ事はない、されば急ぎ歸るも由ないこと、彼處なる高御座に、齒褥を敷き設けたるは、萬機の政事を執行ふ所であらう、その昔平の將門、相馬の里に内裏を營み、新皇帝と號したも、八九年の驕奢に過ぎない、我は今宵手を濡さずして、新皇帝の位に即くであらう」云ひながら彼の高御座にムンヅと座した、ニッコリ笑を含んで保輔「關の太郎、太郎」はい　保輔「其の方は關白に致し遣る　太郎「ハ、ッ　保輔「誰々は大臣に致す、其の方は納言、此方は宰相に致し遣るなど、各々位階を定め、ズッと居並べさした夫れから逃迷ふて居りまする女房たちを、此處彼處から探し出させ、これに酌を取らせて、さしつ押へつ輿を催しましたこと故、衆賊はいよ〳〵笑壺に入つて、まだ皇后の渡らせ給はぬは不都合、寢殿の設けせよ」などゝ戲れ、燗娘かなる女房を撰み出して、手を引き腰を押し、わりなく保輔の傍へ引据へました、それ故保輔は、只管興に乘じ、送に我が術の破るゝもうち忘れて、やがて帳臺の裡に醉ひ臥しましたが、これぞ保輔が運の盡き、いよ〳〵四天王の手に捕縛されやうと云ふお話、次の席にて申しあげまする。

第十八席

これより先頼光卿の局大武の乳母は、心利いたる老女でございますから、落行く路より一人の下郎を頼光公の館へ走らせ「只今云々の事がございまする、疾く兵を遣はして防ぎ進らせ給へ」と急がせた、折しも碓水貞光は、洛中の夜廻りに當つて、居合せませんなんだが、渡邊綱、阪田公時、卜部季武の三人は、此の通報を聞くと等しく、腹卷取つて投掛けました、堀川院に來て見ますれば、門戸は厳しく鎖してある「こは不審しい、聞きしにも似ざる事かな、若しや逃失せたのであるまいか」と疑ひながら、耳を立てゝ裡の容子を窺ひ見ますれば、人數多の笑ふ聲が聞へる、三人は互ひに顔見合せて「さてはまだ逃失せなか

つたか」と喜んで、先づ四方をうち廻つて見まするに、出口々々の門は悉く皆鎖してあるが、唯一箇所後の小門、先程人々が出ました小門が其の儘開いてある、三人の勇士は此の所より這入つて、殿中に忍び寄り、蓦然に走り掛りました事ゆへ、衆賊は麼は何事と周章て騒ぐ、闇の太郎キッとこれを眺めて太郎「生公卿原の青侍、何程の事やあらう、かれ討留めよ」と下知をしたから、十三四人切先を揃へて群り來つた、三人の勇士は何條これに恐れませうや、大勢の眞中に駈入り、十文字巴の如くに驅散した、爲に暫時の間に二十五人を討取り、衆賊算を亂して其の場に斃れて了ひました、闇の太郎も今は遁れぬ所と、渡邊綱と切結び、十合餘り戦ひましたが、遂に之れも討れて了ふた此の時保輔は、尚も帳臺の裡に沈酔致して居りましたが、此の太刀音に夢醒めて、ガバと跳起きた、四天王を眺めて、麼は大變と、俄かに口に呪文を唱へつゝ、逃れ去らんと致しましたが

幻術更に行はれない、庶は口惜しと急れば、網、公時も、彼れ保輔なりと知りました事ゆへ「汝保輔、其處動くな」と奮然として突掛つた、保輔今は脱れ難しと思ひましたか、太刀抜翳して踊出で、兩人を對手に挑み戦ふた、斯る所に卜部季武は、逃げ行く小賊を西の塗籠に追詰め、悉く皆討取りましたが、東の殿上に太刀音烈しく聞ねますから、引返して見ますれば、保輔は既に肩先を切破られ、朱になつて戦ふて居る、其處へ季武が、反つたる太刀を椽の柱に押當て直すと等しく、ドツとおめいて斬つて掛つた、保輔も三方に敵を受けては、支ふる事出來ませぬ、三間許り後へ飛んで、庭の松に手を掛けると見ねましたが忽ち築墻を跳り越ねて、門外に下立つた「奴逃しは遣らぬ」と季武は、續いて墻を飛越ねんと致して、腹巻の高紐が松の枝にひつ掛つた、それが爲に半身外面に下りながら、これを振切らんとする、其の時保輔は、十歩計り逃延びて、キッと見返れば

季武が此の体でございますから、仕合せよしと太刀をふり上げ「覺悟ッ」と一聲、切付けんとする、一刹那、折しも碓水貞光は、洛中夜廻りとして、端なくも此處に來掛りました、怪しの曲者と見るより、保輔にムンヅと許り組み、忽ちハッタと投付けた、其の間に季武が下りましたから、遂に兩人して保輔に繩をぞ掛けたりける、さて頼光公は、四天王の事を、尚心もとなく思ひます事ゆへ、追々加勢の士卒を差向け給ひました所が、早や三十餘人の兇賊は殘りなく討れ、賊首保輔は生捕られたと聞ねましたから、喜ばれる事限りございません、斯る折しも四天王等は、討取つたる首を下郎に擔はせ、保輔を引立て歸り來り、其の由告げ奉つりましたから、頼光公は勇士の武功を賞したる後、頼光「さて〳〵、真光が折能く來らねば、保輔は遂に逃去る所であつたに、四人の勇士が自然に機に合して、容易くこれを搦め得たる事は、實に神妙の至である、さて斯る曲者は、禁

獄すとも又如何なる術を以て、遁亡せんも測り難い、急ぎ誅戮致せい」とお命じに相成りました、其處で其の夜の中に、保輔が首を刎ね、其の後關の太郎以下の首三十餘級と共に、これを使廳に引渡しました、使廳に於ては次の日これを梟首に致されましたが、此處に不思議なるは、保輔が膿丸であつた時分、致忠より授與せられました寶劍でございまする、此の日忽然と失せて、其の行末知れずに相成つて了ふたと云ふ事で、所謂寶劍の德と云ふものでございます、さて保輔が誅せられました時は四十八歳、賊をなすこと三十年、凡て追討の使を蒙ること十五度、また禁獄に三度に及びましたれけども、皆妖術を以て脫れて了ふた、併しながら云の網は漏るゝ事出來ません、勢ひ漸く此處に竭きて、遂に四天王の爲に誅せられました、寶に一飜帝の永延二年六月十八日の事と聞ねました、これで保輔の傳は終りと相成りましたから、之れより愈々大江山の本題に入ります

るが、一寸保輔の養母椹木の事に就て、一席申し述べて移る事に仕ります。

第十九席

保輔が梟首せられました次の日、年老たる一人の女僧が、梟首の邊に來ましたが、保輔が首を見て、聲振り立て哭きながら、終日所をも去らずありましたから、獄役の看卒が是れをば怪しんで、遂に此の女僧を頼光朝臣の御館へ連れて參り、事の由を訴へました、頼光公そこで廳に出で、彼の女僧を召出して自ち問はるゝやう「コレ其の方は保輔に由緣あるものか、何故に連累の答を返り見ず、終日其の邊にあつて啼哭致すぞ」と云はれて彼の女僧答へ申すやう　尼「ハイ、尼は何を隱しませう、保

輔が養母椹木と申すものでございまして、祝髪致して後、説石尼と呼びまするが、先づ事の由を申し上げるでございませう、御聞きなされて下さいませ」と之れから夫六郎二、娘深雪が事並に齋佛尼の事に至るまで、保輔が身の顚末を、詳らかに申し立てました、頼光公つく〳〵お聞きに相成りまして頼光「ウム、其の方が今云ふ處を聞くに、昔最愛の娘を保輔に欺き殺れたと云ふ事である、然らば彼れは其の方が仇に致して、露斗りも恩はない、恩なき人の死を悲んで、自ら罪を招かんとするは、如何なる故であるぞや」問はれて説石尼は、畏み申すやう　尼「ハイ、尼は敢て保輔を哀んで歎くではございません、只積惡餘殃あつて因果覿面の理り、脱れ難き事を感じて歎き侍るのでございます、先づ尼が夫六郎二は、人を殺すの隱惡ありましたが故に、其の身も亦人に殺されました、其餘殃娘にかゝつて、是れも亦横死を遂げました、只尼ばかり可もなく不可もなく、生智に世に取り殘されまして、今日に至りました事、神佛尼をして事の本末を悟らせ、當來衆生の誡めとなし給ふかと思ひますれば、何として悲しうない事のございませうや、賢き御心にも愚かなる尼が歎きを推し給ひまするやう」と憚かる色もなく申し上げた、お聞きに相成つた頼光公は、うむと首肯かれましたが御座の傍に侯じたる碓水貞光を見かへつて、説石尼に示して申さるゝやう　頼光「其の方只積惡餘殃の理を説くと云ふとも、積善も亦必らず餘慶がある、其の方が夫六郎二を射たるものは、予が愛臣碓水貞光である、貞光幼弱の時父橘平を六郎二に殺され其の仇を知らでありし事十六年であつたが、天も其の至孝を憐れみ給ひてか、暗に仇を報はせ給ふた、善惡凡て報ある事之れを以ても知れる事である」と云はれて説石尼はグエ……とばかり慨いて、首を上げて暫し貞光を打ち守り、默然として居りましたが、時に頼光公は又申さるゝやう　頼光「其の方が云ふ所も亦

故ないではない、依てもし願ひがあらば申し出よ」云はれて此の時説石尼、始めて莞爾と打笑ふた　尼「ハイ、尼が願ひは外にございませんがたゞ保輔が首を賜はりまして、娘が墓に葬むる事をお免し下さいたう存じまする、云ふのを聞いて頼光朝臣はお笑ひに相成り　頼光「コレ説石尼とやら、深雪は保輔に殺されれば、幽魂泉下に宿怨を述べん事を思ふであらう、然るに今合葬致さんと云ふは、如何なる理由ぞ」と怪まれましたから、説石尼は法衣の袖をかき合はせながら　尼「夫れ貞女は両夫に見ねずとか申じまする、假令保輔義に叛き慾に迷ふて、深雪を殺しまするとも、深雪は曾て之れを知らぬ事でございまする、知らぬが故に身を殺して節を全う致したのでございまする、且保輔別に妻を娶つた事を聞いて居りませぬ、さすれば深雪は保輔が爲には、操ある妻でございまする、若し保輔を以て仇と致しますれば、深雪が死は徒ら事と相成りまして、貞もなく操もございませぬ、これを合せ葬り夫婦の禮を以て祀りまする時は、深雪は自から貞女の道に稱ひまして、其の死も亦悲むに足りませぬ夫れ故保輔が首を願ひ侍るのでございます」言ふのを聞いて頼光朝臣は、甚だ御感心に相成りました　頼光「其の方の申す事頗る賢い、何人をば師と致して學んだるか　尼「はゝ、近頃畠佛尼に道を聞き侍りまする　頼光「成程、夫れでは如何にも其の願ひに任すであらうが、彼は賊の首領であるから、私には聽し難い、依て其の方、五戒の中一戒を破れ、直き事其の中にあらう」と仰せになりましたから、説石尼は早くも其の意を悟つた　尼「委細承りましてございまする」と立歸りましたが、説石尼は其夜保輔が首を盗みに行つた、すると果して守る人も居りませぬから關の太郎が首と共に、之れを信州に携へ行き、保輔が首を深雪の墓に葬りました、それから關の太郎の首も、彼が地に埋葬致しましたが、今尚御嶽の西街道の田の畔に、太郎が首塚といふ

のが殘つて居りまする、さて説石尼は再び都に上り、蕾佛尼に仕へて、ます〳〵亡人の菩提を弔ひましたが、さても慈心寺の高徳世に聞ゑ高き蕾佛尼と云ふは、保輔が實母節折なる事を、頼光朝臣並びに平井保昌に語りましたから、保昌は始めて之れを知り驚き、之れを訪はんと思ひましたなれども、保輔が事に憚つて、暫らく時を待つて居りましたが所が今日蕾佛尼は、臨終の期を示したと聞きまして、妻女の和泉式部を以て蕾佛尼を訪はせ、父致忠の遺命を告げんと云ふので、斯くて式部は乘物を急がせました、然るに慈心寺に來て見れば、寺門は堅く閉して人を入れませぬ、そこで式部は從者に命じて「丹後守保昌が妻、蕾佛尼の終焉に逢はん爲に參りました、早く門をお開け下さるやう」申し入れると門を守るもの答へて云ふやう「門番「尼は豫て此の事を御存知に相成り、和泉式部どのが參り給ふとも、入れ參らする事勿れと仰せになりましたから、如何に仰せになりませうとも、其の儀は叶ひますまい」と云つて何うしても門を開けませぬから、式部も詮方がございません從者が持つたる矢立を取寄せて、一首の歌を書記しました式部「それでは此の消息を進らせ給はるやう」言つたが門番は門番「折角でございますが、それも相叶ひませぬ」と云つて、何うしても承知を致しません、式部は困り果てゝ、早や臨終の時刻にもなるであらう、歴は何うすれば宜からうに……」と暫時猶豫ふて居りまする折しも、性空上人が兩人の徒弟を引連れてお在でに相成りましたから、式部はそれと見るより忙はしく式部「上人さま、之れを御覽下さいますやう」と彼の短冊を押開き、其方へ差向けた、上人これを御覽に相成りまするとくらきより闇き道にぞ入りぬべき遥かに照せ山の端の月に

性空上人三度吟じられまして、うち點頭かれ上人「されば貧道と

共に在せ」言はれて式部はうち喜び、上人の後に從ふて、齋佛尼の端座したる前に出て參りました、すると齋佛尼は細やかに眼を開き、上人を拜したる後また式部を見て、眼を閉ぢましたから、上人は聲高らかに四句の偈を示されました

貧而亦賤　閑亭大姉　以レ之爲レ樂　不レ羨二富貴一。

すると齋佛尼はまた四句を續いで

我不レ知レ人　無レ根無レ喜　人不レ知レ我　無レ譽無レ毀。

と吟じ終りましたが、卒然として遷化致しました、享年六十九歲でございまする、其處で遺命によつて說石尼が、二世の住持と相成りましたが、此の人は七十五歲を以て、大往生を遂げました、併しこれは後のお物語、いよ〳〵次席より大江山鬼賊退治に移ります。

第二十席

さても頼光公は、强賊袴垂保輔を退治に及びましたから、之れより引續いて諸方の賊を退治致さうと、それ〳〵準備の最中でありました所へ、丹後の國主平井保昌の目代藤原保友が、大江山へ鹿狩を致して、圖らずも相馬太郎良門、今改めて酒呑童子の巖屋の在所を知つた、此の事は前編に詳しく申し述べて置きましたから、更に申し上げませぬが、保友は立歸つて、此の由を平井保昌に物語をした、其處で保昌は、早速丹波の國主大江友群と相談の上、これをば京都へ注進に及びましたので、頼光公は固より賊徒退治の準備中ではあるが、大江山へ乘込むに就ては、數多の軍勢が入る、先づ二萬五六千の人數が入る積であ

りますから、俄かに其の軍勢を集める爲に、日を費して居りました……、お話變りまして酒呑童子は、大江山の山寨に立籠り日々美衣美食に飽き、美しい女を數多侍らして酒宴を催し樂じんで居ります、それから股肱と頼みました茨木童子は、鬼ケ城に巖屋を搆へて、江州膳吹山に居りました棟牛等と共に立籠つて居る、前鎬に袴垂保輔並に市野鬼同丸が、大江山に落ちて居るやうに書きましたが、だん〳〵調べて見ますると、右兩人は京都で退治られた事になつて居ります、此處に序ながら訂正致して置きます、さて此の鬼ケ城と大江山に立籠つて居る山賊が、實に夥しい人數でございまする、其の手下の奴等が、近郷村里を徘徊して、富める家に押入つて、金錢財富米穀を奪ひ取ること、幾十萬と云ふ限りが知れませぬ位、今日は宮津の方を荒すと、明日は但馬の方で强盜を働く、時々は都路へ樣子を見がてら、働きに出る奴もある、國中これが爲に騒動して、萬民更に安き心もございません、家毎に用心嚴しく、夜になれば道を往來するものもない、富める家々は五人八人十人二十人と力量あるものを雇ひ、不寢番を附けて置くけれども、酒呑童子だの、茨木童子は、神通不思議の術を持て居りますから、是等を更に事ともしない、目指す方へは押入つて、奪ひ取らぬと云ふ事はない、其の忍び入る樣子を傳へ聞きまするに、丹後國由良港の片邊に谷村郷右衛門と云ふものがある、田畑多く貯へ持つて、金米調度は數箇所の藏に滿ち、頗る富豪の聞えがあつた其處で此の郷右衛門、此の程の評判なる强盜を防がんと云ふので、近村隣里の土民共に金銀を與へて、豫て頼み置き、其の中に力量强きもの、武術の心掛あるものを二十人づゝ雇ひ、毎夜不寢番をさせる、而して法螺貝、拍子水、鐘太鼓、鐵棒刺叉、鎌竹槍、其の他利器を用意して、素破盜賊よと云ふ時は、鐘を鳴し太皮を敲き、聲をあぐるを合圖として、溝付丘且り土塁ど

も大勢、うち寄集つて、一人なりとも盗賊を搦め取らんと、手配をして、要害堅固に構をました、然るに或る夜の事、丑満の頃に至つてかの不寝番のもの共、不圏奥の方を見てありますれば、奥座敷に燭臺若許ともなく並べ置いて、蠟燭を燈して居ります、不寝番のものは互に耳語いて「オヤ今宵は主人郷右衛門どの、何故に早起をせられたのであらう、但しは時など違へられたのであらうか」と笑ふて居りました所が、忽ち次の間にも燭臺があつて、燈火さつと燃ました「オヤ〳〵、こりや何うした事ぢや」と見る間に、又外々の座敷にも、燭臺の數並びめつて、自から火の燈る事、野邊の狐火に異りません、見る〳〵家内一圓に燭臺にて、燃燭の光炎々と、恰も真昼の如でございます「あれ〳〵、こは不思議な事ぞ」と見て居りまする中に、忽ち我が居る傍までも燭臺が並んで居りますから、不寝番のものどもは膽を潰して「オヤ何事であらう」と驚きて居ります中に、何時の間に這入つて來ましたか、早や盗賊共立廻つて、家の内に充満して居ります、此の時座敷の中央に、盗賊の首魁と思しきもの、威風凜然と致して床几に懸りましたが、猩々緋の陣羽織に大太刀を横へ、軍扇とつて八方に下知を傳へて居ります、之れぞ即ち相馬太郎良門の酒呑童子でございます而して小賊共は十人づゝ一手になり、其の中に一人づゝ頭立つたるものがあつて、七手に別れて働きました、大勢の不寝番の者共は、此の体を眺めて生膽を抜かれたる心地、聲を立てんと思ふものもない、また戦はんと思ふ氣力もない、酒に酔ふたる如くで、たゞ茫然として眺めて居りました、斯くて半時許りしますると盗み出した數々の財寶を、數多の小賊に荷はせ、門を開いて皆出しやりましたが、かの首領は跡に殘つて、門の扉を元の如くに堅く鎖し、また初の座敷に戻つて床几にかゝり、一聲から〳〵と笑ひましたが、手をパチ〳〵と三度うち鳴すと、今まで

家の内白昼の如く明かつた六七十の燭臺は、一度にサッと消失せて、闇々たる黒夜と相成つた。

第二十一席

此の時不寝番の者どもは、やう〳〵に人心地ついて、俄かに聲をあげ鉦を鳴し、太鼓を打つて騒ぎました事ゆへ、家内一度に起出で、急に燈火を照して見廻りましたが、かの首領は何處へ行つたか影もない、剰さへ遊りに燭臺など一つも見ねない、殊に燈しかけの蠟燭さへございませんから、こは不審やと驚き廻る、兎角する中に近村より、鉦太鼓の音を聞きつけて、數百人の農夫ども、手に〳〵竹槍鋤鍬、鎌鳶口なんぞを引擔げ、追々に馳集り、谷口郷右衛門が屋敷の近邊は、提灯松明行違ひ、

雲霞の如くに見ねました、されども谷口が方にては、財寶殘らず奪ひ取られ、盗賊も皆歸つた跡でございますから、所謂戰ひ過ぎての棒千切木、何の益にも相成りません、併し餘り殘念とて、それより四方へ手分をして追駈けさせましたが、犬の子一匹も見當らぬ、皆すご〳〵と歸つて來ました、斯う云ふ有樣で都て此の手段に限りません、種々に手を更へ品を替へて押入りましたから、盗まれざる豪家はなく、押入らざる豪家もない、百姓これが爲に難儀に及び、追々領主へ訴へ出でましたから、領主よりは又都へ訴ふ事、櫛の齒を挽くが如くでございます、それ故賊徒討追の命を受けました源頼光公は、急ぎに急いで軍勢を催促に及び、大江山の道案内は平井保昌が承はる事になり正歴元年正月二萬餘騎の軍勢を引連れて、京都に御出發に相成りました、さうして一先摂州多田に落付き、頼光公の御子息頼國どのが二千五百人の同勢と合併致しました、夫れより多田を

出發に及び、笹山から福知山なる法恩寺へ乗込んで參り、此處に本陣を構へて、鬼ケ城と大江山と二手に向ふ謀畧を相談に相成りましたが、愈々明日は出陣と云ふので、その前夜祝ひの宴が開かれた、お話變つて、此の大軍の討手が向ふたと云ふ事は、疾くに山寨に聞へて居りますから、酒呑童子徐ろに計畧を廻らした彼かに鬼ケ城の茨木童子を呼寄せた、而して何かヒソ〳〵と私語示しつゝ酒呑「急ぎ行つて來い」と追立て遣り、自分も身拵ねに及びましたが、此の茨木童子といふのは、酒呑童子に妖術を學び、飛行の術に長けた男でございまして、今は酒呑童子が股肱の一人と頼んで居るもの、急ぎ支度を致して小者一人を從へ出行きました、さて此方は頼光公を初め一同、酒宴を催しまして、齊しく武運長久、賊徒誅伏を祝しましたが、其の折から軍卒一人走り來つて

○「恐れながら申しあげます、只今大門の外へ、齡まだ若き一人の男、異の衣服を着用致しまして

頭上には烏帽子を戴き、一つの皷を左手に持ち、米囊を右手の肩にうち擔げ、之れは三河の國なる萬歳のものにて候、年の始めを祝ぎて、國々を廻りまする、御寺院なれど年賀の吉禮、ひとさし舞せ下さるやう、と云ひつゝ恐れず這入りましてございます、此奴御大將御座處とも憚らず、況て御軍陣の構へをも得知らぬおぞましき奴と、叱り懲して去らさうと思ひまするが、田舍者の事とて、是非にひとさし舞させ給へ、見れば勇ましの御扮裝こそ、かの都の御軍勢にや、さあらば別して幸先を祝はせ給ふが、其の年の吉兆でございませうと口說きまする、私共いたく叱り辱しめますれども、聾いたる如く退出るさまもございません、たゞに皷をうち鳴し、山風しのぐまでの事、少刻御内へ入らしめ給へと、理なき所望に、持餘しまして、別に不吉のものでございませぬから、詳かに言上致しまする、御進發の折柄と云ひ、立春の御賀儀にもと、衆卒漸く存じました故に、

暫らく彼れが言葉に任して、門内へ控へさせて居りまする、此の由御披露せられ給はりますやう」と一伍一什を申し述べましたから、之れを聞取りました卜部六郎季武が、頼光公に向ひ、季武「御前、只今聞し召さるゝ通り、如何計ひ申しませう」言ふと頼光公、うち點頭いて笑はせ給ひ　頼光「むゝ、時と云ひ物と云び能き吉例の三河萬歳、苦しうない、庭上に呼入れて、彼の望む如く舞させるが宜からう、何れも幕をかゝげて見物を致すが宜からう」と既に座を立せられたから、渡邊源次綱がこれを止めて　綱「これはそゝろの事を好ませ給ひまする、諺に大事の前の小事と申せば、然るねせもものを御前間近く召せ給ふは、甚だ不祥にございます、君子匹夫を愛せずの敎も候、心を得ざるは此の丹波路へ、優長らしく萬歳などの、徘徊致すは、愈々不審にござる……やをれ兵卒、其の奴とく〳〵ぽつ返せ」と敎圍あらく差止めました、頼光公は微笑みながら頼光「いや〳〵、萬歳と

か申すもの、其の身一人なりとや、よし敵方の間者にあれ、また何事をか仕出すべき、深く心を用ゆるにも及ばぬ、僅か一人の下郎に怖ては、味方の勇氣にも關はる、決して構ふな〳〵」と仰せになりましたから、源次綱も口を閉ぢた、其處で廣椽前に頼光公を初め、諸將一同ズッと居並び、幕を高く左右の柱に結びつけて、待つて居りまする處へ、命に依つて軍卒一兩人が萬歳を前後に挾んで連來り、遙か土間に居坐らせましたが、前の卒大地に頭を下げて　○「申しあげまする、萬歳の下郎一人、之れへ召連れましてございまする」と言上した、すると渡邊源次綱が進み出で　綱「こりや其處な嗚呼者、奴存外な男である、恐れ多くも頼光御前の御旅館に來つて、古びたる萬歳踊、蠢の内賑さん爲か、疑はらくばもがり登鳶の類にや、然なくとも慾の厚皮に上懼らで、墓の育ちに前辨へず、大膽にも來りしものかな、平日都御殿内に在す時ならば、蛔虫同樣の汝等風情、築

地の理覩くすら成り難きに、不思議にかゝる御旅陣ゆへ、端近ら渡らせらるゝ、御前なるぞ頭が高い、身の程知らぬ虚氣もの め……」と大の眼に角立てゝ、權威に任せて叱りつけたが、さて此のさき如何相成りませうや、茨木童子單身にて、頼光公の御前を騒がすといふお話。

第二十二席

源次綱が餘り叱るのを憐れに思ふたが阪田公時が、之れを押止め公時「いや源次どの、いたく咎め給ふた、かれ強ちに無法を言入れたさのでもござらぬ、年賀の祝に己が所作を、一さし舞せ給へと乞ふ許りでござる、匹夫下賤の禮義に疎きはなべて、下様の常でござる、さらば年新なる禮儀と云ひ、賊徒退治の前祝

再び君が御代あらたまる、御家運いよ〳〵萬々歳、三祝吉日此の上でござるまい……こや〳〵男、わるびれずいざ仕つれ」と言葉和やかにも、公時が指圖に萬歳男、土に付いたる頭をもたげ、揮へる聲して申しけるは

○「こはそも如何に、斯樣に貴きお方さまの、御座所へ召出されて、五体を浸す冷汗に、思はぬ熱さを覺へました、斯くと知つて居りますれば中々に、寒風しのぐまでもなく、山を下りましたものを、御別當には年毎に、大臺所へ招かれつ、鄙の唄ざま古雅なりとて、多く好ませ給ふ御出家ある由、仲間の男が話しましたがら、雪吹風の山風に、蓑より先づ手出をば、温む惠み受けませう」と慾と德の我が儘萬歳、せちに乞ひましたは寵下の、焚火あたりを望んだのでございまする、皷つゝまる三十日旅、古郷寒く掛取の、軍免れて來て見れば、此處も弓張提燈に、雄々しくも大江山の、賊徒退治と聞きましたで、我も攻立て借財を、逃足早く立去れども、

變れば替る瀬戸際に、寒氣懐中攻め鼓、一夜を松の内よりして呼入れ給ふは有難しと、前賀の裏が來つ、端午節句の生武者達が、斯くまで取圍れまする上は、お詫び申したとて此の儘許されますまい、何と正月ものなれど、旬に順じた萬歳踊、鄙の古びは國風と、許しなされて御覽下さいませ、さあらば一振舞ひ申しまする」と能く解らぬ事を饒舌る奴、節をつけてべラ〳〵と饒舌りましたが、皷おつ取り立上つた、やがて濁みたる聲をふり立てゝ、節面白く唄ひつゝ、足拍子を踏鳴し

「德若に御萬歳と、御代も榮ねましまし、偖しも長閑に新玉の、年立かへる朝より、御國和平、夷賊も征伐治りは

るは、實に目出たく候ひけり、長へにすめらぎの、萬代豐か東西に、君の御座所も久かたと、祝ひ賀ぶ萬民や、

關の戸鎖ぬ旭の光、常盤に松ぞ樂しける」

と舞ひかなでだ、頼光公を初め諸將は殆ぞ笑壺に入つて、やん

や〳〵と賞めそやしましたが、源次綱一人は胸惡くて、讃めもせず笑ひもせず、苦りきつてありましたが、頼光公の一言に的を轉して萬歳に向ひ源次「やをれ白物、さて〳〵奴はよく饒舌る頬桁かな、世にも知つたる鄙唄に、軍の一條こじつけて、羞かいやかしくも大音に、ほざいたる憎さよ、都武士はいづれも皆風流の秀歌音曲嗜まぬものはない、然るに野八丁の法螺聲もて人もなげに斯る處にて、德若にとは能くも吐した、奇怪とや云はん無禮とや云はん、世に言ふ井の中の蛙たる、土ほせりの田舍夷、祝儀ものせん底たくみ、叶はぬ事と諦めて、とく〳〵御前を立去れい、ぐず〳〵すると用捨はせぬぞ」と太刀拔かけて立上つた、萬歳は吃驚仰天、こけかゝる襄と共に身を起して、面色青ざめ胴慄し

○「さて〳〵親方さまには氣の早い、短癖の御人でございまするな、何條祝儀乞はんとなす業なれば、恐ろしき斯る場所に、己が手業を致しませうや、御武運息災ことぶ

くまでに、手の舞足の拍子まで、狂ひ踊りし落が來て、お目玉賜ふとは思ひがけませぬ、仰せなくとも私から、早々お暇を蒙りまする、固より仇骨は承知でございますが、上さまの人程して喰へぬ世渡り、こりや私の厄拂ひでございますわい」と呟いた、源次綱は之れを咎めて　綱「奴、能くも饒舌る奴、とく立去らねば斯うだぞ」と立上つたから彼の萬歳　○「御免下さい〳〵長居は無用……」と後をも眺めず、蹌ゆり上げ鼓片手に、周章てちらけてこそ〳〵と、切戸押開けましたが、其の儘蜘蛛の如くに走出でました、賴光公はこれを御覽じて、又も一笑して在しましたが、斯る所へ引違へて遽しく、一人の軍兵走り入り、大庭へ平伏して　兵「御注進……、申しあげます」と云ふ、源次綱これをキツと眺めて　綱「火急の知せ心得難い、其の方は今曉先發致したる藤原保義が郎黨でないか、凶事か吉事か心もとない、何うした〳〵」　問はれてかの軍兵　兵「左樣にございまする

仰せの如く主人保義、先手と致して既に鬼ケ城の此方まで、軍馬を進めましたる處、暗さは暗し山また山の、物の黑白も分らぬ細道、松明便りに數萬の味方、敵の伏兵ありとも知りませず一足下りに押して行きまする所へ、何處ともなく箭を放ち石を飛し、奇礫を投付けまする、味方の兵士は思ひも寄りませぬから、途に惑ふのみで詮術なく、散々に混雜致し、松明の火も打消して了ひ、疵を蒙るのみならで、がけ踏すべり數丈の溪へ、米俵を轉ばす如く止度もなく、陷るもの其の數相解りませぬ、我が主人保義も、大石を脊に投付けられ、馬諸共に倒れ伏しまし たを、漸く助け退きましたが、中々頓に癒る術もございません、夫れ故只今殘兵を引具し、歸陣に及びましてございまする主人保義退陣の言譯、不意の珍事の体たらく、拙者を以て訴ふる所、斯の始末にございまする」と言葉忙しく言上をした、大江山鬼賊退治困難の一條、之れより申しあげまする。

第二十三席

これを聞いて頼光公を初め、並居る人々は大いに驚きましたが頼光公は左あらぬ体で頼充「左様か、此の度の賊徒は固より容見ならぬと心得る、兎もあれ保義が、聞くが如き重傷であれば、さぞ自由なるまい、早々京都へ立歸り、たゝ平癒の術こそ肝要である、そな男大儀であつた、退出致せよ」とお免しに相成りましたから、保義の郎黨は頓首いて、諸將等へも一禮し、その儘御前を退りましたが、此の時又もや塀の外より、駈來る足音家臣なるか、但しは從將よりの使卒か、前の注進は粗聞いた、と諸共に「御注進、〳〵」と呼はつて、廣椽前に走入るものがございます、渡邊源次綱キツと打見て綱「其の方は北畠仲時の

途中の様子をとく〳〵語れ」と尋ねると彼の者頭をあげて「されば申ございまする、味方の人々は長夜山中に居堪らず、再び軍を進められました所が、忽ち前後の樹木の間より、火炎一度に燃上りまする共に、四方これを合圖として、烽火をあげて鯨波、味方に勝つた敵軍數萬が、遠卷になす有様でございますから、最初に懲りました諸軍勢は、色めいて指揮も用ひず、早や遁足と見ねましたので、急いで大將自ら御出馬下され、後詰の軍勢催さるべく、主人仲時拙者をして、此の儀言上致せよとの事にございまする、斯く申す拙者は、卽ち郎黨の伊庭三平と申すものでございまする、急ぎ御出馬あらせられます様」言ひながら頻に椽際近く、身を進めて訴へました、頼光公は先の程より此のものゝ面をば、眉うち顰めて御覽に相成つて居りましたが、忽ち御氣色荒々しく、御椽をつゝと立ち給ひ頼光「あら奇怪の奴かな、各々油斷を致すな、其の伊庭三平と名乘るもの

こそ、曾て比叡山の奥赤山にて、妖術を用ひたる茨木童子に相違ない、それッ搦め取れッ」と仰有つたから、人々は此の仰せに仰天して、座中等しく騒ぎ立つた、此の時伊庭三平身を起して、頼光公をハッタと白眼み三平「能くも見抜いた頼光、伊庭三平とは偽の名、我こそは相馬太郎良門酒呑童子が肱股と頼む茨木童子である、恨重なる仇敵、我に首を渡せ、其處動くな」と云ひも敢ず、椽先へヒラリと飛上りました身の輕さ、腰に帶したる不動丸をズラリと引抜いたが、眞向に振翳して、頼光公望んで飛掛つた、此の有様に四天王を初め居並ぶ大勢は、驚き狼狽く「尾籠なり盗賊め、推參至極」と聲諸共に、各々一様に太刀を抜放ちましたが、御大將へ立塞り、茨木童子を中に追取り圍んだ、八方より切て掛ると茨木童子は茨木「無益の腕立、妨げ致すな」と荒に荒れたる太刀先は、右を拂ひつ左を支へ、双足一手にけり跳退る、其の手練早業虚々實々、身は稲妻の迸る如く、風に薄の白玉散る如くでございまする、たゝみ掛けて打つとすれど、飛つ潜りつ身輕の進退、衆人の打込む太刀先は、或は空を突くもあり、夫れと認めて切付るに、味方の兵士楯とし遁れられて、同志討をするものもございます、四天王は固より萬夫不當の勇士でございまするが、茨木童子が獅子奮迅の勢ひに、孰れも頼光公の身に心引かれて、動もすれは太刀筋乱れ、各々浅疵を負ひました、四天王の如き人々が、一人の茨木童子に切立てらるゝ所を思ひまするとと、酒呑童子が肱股と頼みましたのも、無理はございません、餘程腕のあつた奴でございます、何でも御大將を討取らんければ相成らぬと、躍り上り跳上り、右手もて切伏せ左手には、間近き兵士手當り次第に、手足髻或は胴上帶、さらひなく引掴んで、礫となして投付け、打付け道を開かば頼光公を、一太刀にても切付けんと、滅多打にぞなしました、これが爲にさしも間廣き大座敷も、踏走る足音、ど

うゝと高鳴して、障子紙戸は碎けはづれ、瞬く間に大床も、崩れ落つべき覺へられて、劒の刃音うなり聲、物凄まじくも恐ろしい、茨木童子が惡戒に、軍兵忽ち七八十人、身首所を異にして、彼處此處に斬倒されました、中には半死半生のもの、苦痛の聲うら悲しく、進みつ逃ぐる兵士に、踏にじられて蠢き、つらさの餘り太刀振廻し、足蹴倒して友討もするもございます、然れば鮮血は青疊を浸して、其の光景實に慘澹たるものでございます、此の間に頼光公は別房へ立退かれましたが、さても茨木童子は、萬夫不當の强勇でございますから、氣力更に衰へない、血湖滴る名刀を揮つて、手向ふ任せに斬殺しましたが、はや目指す大將頼光公は、何處へか立退きましたから、今は望みを失ふた、さうして身は籠の鳥の如、群犬の迫る狐猿の有樣、一筋の活路も得難い、撓むではないが早や此處に及んでは、自然と勇氣が挫けました、稍腕は勞れて來る五体は痛みを覺ねるまだ淺疵一つも負ひませぬが、呼吸苦しく眼暈んで來た、併し隙なく打込む多勢の刀先でございますから、受けつ外しつ掬ひつ突きつ、千變萬化の働きをして居るものゝ、敵は大勢味方は己一身、殊に的とする頼光公が居らんのでございますから、心の中では、底は狗死に相成らんと、殘念に思ひましたが、今はすべき方便もない、必死の勇を皷して盲打に斬立てなぎ立て致しましたが、既に倒れん心地致し危くぞ相見ねました。

第二十四席

斯る折しもあれ不思議や、天地忽ち鳴動致して、一陣の惡風颯と吹立つ音に伴れて、曜靈晃々たる晴日、一瞬の間に雲も稜は、油然と沒して了ひ内外一度に常暗と相成つた、而して地は

いよ〳〵震動するから、込合ふた軍兵等は大いに叫んで「こは怪し〳〵、こは何うした事ぢや、天變といひ此の有様は、家も山も地中に陥入るものか、あな恐ろしや〳〵、さては茨木童子、身を遁れん心より、例の妖術を行ふて、視聽をくらます奸計かあら奇怪の曲者かな、だがやみ〳〵逃さんも殘念な事……」と口々に呼はつて憤りましたが、尺寸見分ぬ烏羽玉でございますから、何うとも仕様がない、四天王の連中は手疵を受けません が、何でも討取らんと敦圍く中に、此の事變起つて、茨木童子は固より、我も味方も姿が見ねませぬから、各々無念の拳を握り、齒を喰しばつて空を睨まへ、長歎なしてぞ立つて居る、所がこれ又不思議、眞闇の裡に以前の萬歳が、再び鼓を發しつゝ皷の音いと澄渡つて聞ねた

「岩戸開けし古昔も、斯くぞありなん除夜の闇、修羅の雲霧晴散りて、年の終の一眠、うつゝに齡過ぎにけるかな」

斯く唄ひ終つてから〳〵と高笑ひをしたが、打きる皷の音と等しく、深きさ霧の消ゆるが如く、今までの常闇は燦然として晴渡つた、人々の顔は互に現はれて、須臾の間にまた元の白晝と相成つた、されども茨木童子は何處へ行つたやら、かの萬歳は と見廻したが、之れも遂りには居らぬから、就れも惘れ果てゝさてこそ妖術を以て誑かしたのか、尚また彼の萬歳と見しも、正しく同類の賊であつたのか、此といひ彼といひ、恐るべき曲者かな」と口々にわめき罵つたが、今更何の詮術もない、互に顔見合せて人間惡き体たらく、胸をうつてぞ怒りましたが、さて此方は頼光公、四天王を初め平井保昌、大江友群等をお招きに相成り、此處に又もや御評定と相成りましたが「此の上は双方一擧に攻破らんければ相成らぬ、依て軍勢二手に分れて攻上らう」といふ事になつた、其處で鬼ヶ城へは道案内者として、丹波の國主大江友群が先陣する、これが大將は頼光公の子息頼

國どのが、五千の兵を率ゐて下天津に本陣を定めました、それから大江山へは總勢二萬の兵が向ふ、總大將は頼光公でありますが、渡邊源次綱は常に君側に侍り麓知山の本陣に居る、其の他はそれ〴〵同勢を率ゐて瀧水、長尾、行穢の間道を駐屯する一方は公莊、河守、二俣、内宮の本街道に出張りました、これが案内者は平井保昌でございます、さて斯うして軍勢を進めましたが、お話二つに分れ鬼ケ城へ向ひました軍勢でございます先鋒は攝津國多田の住人多田傳五郎勝吉でございます、七百餘騎を從へて眞先に進んで馳登る、所が茨木童子の方でも抜目はない、種々評定を致して「いざ然らば都勢に一泡食せて樂しまう」と計策を極めて待つて居りました、斯くとは知らぬ多田の同勢、續いて和泉國の住人小出、河内國の住人島田等、追々と上つて參りましたが、思ふに增る嶮山にて、岩石屹々と峙ち立ち屏風を立てたる如く、芒草は鬱々と茂り網目を潜るに似て居

ります、登り〴〵て彼方を見れば、此處に一つの巖門がございます、堅く鎖して人音もない、許多の軍兵これを見て「さてこそ盗賊の住家は知れたれ、とく打破れ」と喚きつゝ、豫て用意に持たりける蕊口を以て、かの岩門を打たんとする時、立地左右山の上より、ドロ〴〵ッと響いて、碎けし大石伐りたる大木或は三尺或は五尺の大石が、幾許ともなく轉げ落ちて來た、これが、數多の軍卒の頭の上に落掛りましたから、フワア……と大聲あげて、之れを避けんと致したが、何分双方は屹立せし岩壁、其の間は僅かに一間位しかございませぬ、固より横切らん道もない、所が後よりは數多の軍兵、此の事を知りませぬから エイ〴〵と押して來る、爲に先に進んだ者どもは、落來は大木大石に打挫かれ、頭を碎かれ身を破られ、矢庭に死するもの數が解らぬ位、後陣の者どもはやう〴〵に之れを見附けて、腦を消し魂を飛ばし、慄き狼狽へ喚きつゝ、或は谷に墜つるもあり

或は人に踏倒され、疵を蒙るものもあつた、倒つ轉びつ逃げ下る多田勝吉は辛うじて山を下りましたが、初めより敵といふ者一人も見ずして、我が軍卒のみ二百人許り死にましたから、流石に面目なく思ひましたが、其の後は一向に他に會ひませぬ、病氣と披露して陣屋に閉籠り、工風を廻らして居りました、然るに此の事を聞いて小出判官、島田左衛門尉は、我れこそ攻破らんと、次の日の早旦より、其の勢一千二百餘騎にて一同攻登りました、やがて石門の邊りに行つて見ますれば、昨日大木大石にて打挫れた軍兵どもは、大石の下に敷れ大木の間に挾れ、まだ死きらぬものもございます、小出、島田等が軍兵の來るを見て、虫の鳴く許りの聲を出し「助けよ〳〵」と呼び、其の聲いとも憐れでございます、小出等が軍兵これを見て助けんとはすれども、かの大石ども容易くは動し難い、また石門の方へ進まんとすれども、石木累々と重なつて居りますから、なか〳〵に之れを越ねて行く事は難しい、さればとて一攻攻めすは相成らぬといふので、小出、島田の兩將は、頻りに下知を傳へ、岩を乘越ね死人を路んで、辛うじて石門の邊りに近づきました頃、俄かに前後左右の山の上に、関の聲どッと足つて、谷谷に響いて物凄く、天地も崩るゝ許り、寄手又もや敗北といふお話でございます。

第二十五席

さらぬだに目前に、昨日の死人を見るにつけて、怖氣の附いた軍兵ども、此の関の聲に驚いて、少しく逃足を催す處へ、忽ち山上より大いなる枯木の杖に火をつけて、雨より繁く投落して來た、此の体を見るよりも、小出等が軍兵ども「さては又敵

の計策に陥つたるぞ、逃げよ〳〵犬死すな」と逸足出して逃迷ふ、二人の大將はこれを見て、聲を限りに下知を傳へ、逃げるな引くなと叫びまするけれども、耳にも更に這入ちない、岩に滑りて足を挫き、逆樣に轉けて頭を碎き、人の槍にて貫かれ、我が刀の鞘走つて同輩に疵を負せ、何の前後も辨へず、只管に逃下つた、それ故小出、島田の兩將も、詮方なくて引退きましたが、今日も亦敵の顏一人も見ず、唯空しく遁下つた事面目なく、明日は疾より押寄せて、死を一定にして攻むべしこ、其の日は陣所に休らひましたが、さて第三日目に相成りました、今度は攝津國の住人荒木、大久保、奥田、河内國平野、柏原、大和國玉井等は、昨日一昨日の兩度に、寄手のもの敵の顏一度も見ずして、散北なしつる事、武士の恥辱末世へ殘る口惜さよ、今日は我々共馳登つて、死を一定に決して、盜賊を滅ずであらう」と皆我れ先にと攻登りました、所へ昨日敗北を致しました

小出、島田の兩將も遙かに後れて馳上り、昨日恥辱を取つたれば、今日は負くるとも勝つるとも盜賊どもの顏を見ては、一寸も去るべからずと、前に進みし他の軍勢を押退け搔退け、岩角に縋り木の枝に取付いて、路もなき所を馳廻り、我れ先陣に進まんと、互に爭ひ馳上りました、また一昨日逃下つて恥辱を蒙りました多田傳五郎は、諸軍一同に攻上るのを見て、「斯くては生涯の恥辱である、いざさらば人々を追越して先陣に進み、快よく討死して、名を後代に遺すであらう」と之れも同じく道なき處を馳上る、斯くて山上に到りまするこ、今早や亂軍、荒木大久保、柏原等の軍勢は、皆入亂れて誰れが備へといふ事も解らぬ、猥りに押合ひ揉み合ひして、山洞近く到つて見ますれば思ひきや昨日まで、大木大石にてうち挫かれ、倒れ死したるものゝ、鎧兜太刀衣服は、皆剝取られて死骸は裸のまゝ、岩の狹間或は谷間に捨置いてございまする、數多の軍兵は此の死骸の

形様を見て、忽ち心に一物の後れを生じた、また大木大石などは何處へ取納めましたか、其の邊りには一つも見ねませぬ、其の通ひ路も綺麗になつて、木の葉の塵も見ねませぬから、人々心中に些しく怪しみ「さてもし〳〵此の盗賊共、また如何なる謀計をかなすであらう」と思へば、驚より登りつる時の勢ひとは様替り、其に上自他の軍兵入交りに相成りましたから、人の心も一決致しませぬ、されども逸雄の者共は眞先に進み近づき、かの石門の扉を高口にてしたゝか打ちました事ゆへ、さしも堅固に造りたる石の扉も、忽ち左右に開いた「さてこそ門は破れたか、いざ攻入れよ、者共」と一度にドッと押入り見ますれば、こは如何に此岩門の裡は家もなく山もなく、何十丈とも計り難き深い谷でございます、一寸も先へ進んだならば、忽ち地獄へ陥るのでございますから、これは〳〵と許り躊躇を冷じたされども後の軍兵共はこれを知りませぬから、大勢ひた押に押

掛けて來た、各々谷へ落ちんと致しますから、或は岩角と取付き、或は門の柱に縋りつき、木の根に抱きつきなどしつゝ、大音に呼はつて「ヤア押すな〳〵、押すと危ない、またもや敵の計畧に陥つたぞ、此の門内は谷底ぢや、落ちては犬死するぞ、押すな〳〵」と呼はりましたけれども、遙か後へは聞ねませぬエイ〳〵聲して押して來る、此方では一生懸命の聲を絞り上げて「ヤア、此の門内は陥し穴だぞ、引けよ退けよ、危ない〳〵」といよ聲段々に言継ぎましたから、やう〳〵に後の方へも通じましたか、暫し控へて押來らない、先に進んだ軍兵も、辛うじて谷底に落つる事を通れ、跡へ引かんと致しまする處へ、忽ち谷の向ひより、関の聲をドシと揚げて、矢を射出す事雨よりも尚重かり、此の箭に當つて死するもの、其の數更に相解りませぬ、すると又左右の山の上にも関の聲ドッと聞ねて、大いなる石ども、ゴロ〳〵と轉び來り、打殺さるゝもの若干ある、其の

上雲霧立覆ひて、前後東西更に分らぬ、初めの程は死を一定に決して、生きて再度歸らぬと、思ひ詰めたる者共でございますから、一人にても盜賊の姿を見たなれば、刺違へて死なんものと、眼を八方に配つて居りまするけれども更に一人の敵にも遇はぬ、たゞ深き谷に落ち、石に打たれて犬死せんは、口惜と思ふからに、終には空しく逃去つて了ひました、諸國二十餘人の大將達も、逃ぐる士卒に誘はれて、思はず麓へ逃下つて了ふ、詰り今日も亦賊の顏一人も見ないで、數多の軍兵敗北して、大いなる恥辱を示した事でございまする。

第二十六席

此處に播州の住人新兎七郎、朝山左衛門の兩人は、數多の軍勢

先を爭ひ、入亂れて馳上るを見て「斯の如く備を亂して登る時は、假令敵に出遇ふとも、勝つ事はよもあらじ、如じ今日の軍は他に讓つて、我等は此處にて見物しやう」と云ふので、頓て傍らなる山の、少しく平かなる處を見立て、此の處に陣を取つて、遙かに眺望して居りました、するのと案の如く數多の軍兵ども、今日も亦戰はずして逃下りましたから、新兎、朝山の兩將は笑壺に入り「さもあるべき事であるわい」と打眺めて居りました、さて暫らく致してから朝山左衛門は、物馴れたる士卒二十人許りを選み出し、かの石門の邊へ遣はし、樣子如何と窺はせた、處へ先刻の敗北に、戰はずして死んだる軍兵三百人許り、其處彼處にうち倒れて居ります、それを見ば山洞より四五十人の小賊ども出でゝ、鎧衣服太刀などを剝取つて居りますから、これを見るより馳寄つて、新兎、朝山が士卒二十人の者ども、これを見るより馳寄つて、散々に伐散す、小賊共も扱合せ、劣じと戰ひましたが、朝山が

卒一人馳歸つて、斯くと告げましたから、新兎、朝山の兩將は これを聞いて「さらば押寄せよ、者共」と下知に從ひ數多の軍兵一度にドッと寄せました、山洞の大將茨木童子は、此の体を見てうち驚き、突然の事でございますから、幻術も行ひ難い、據ろないから數多の小賊を追々に出し遣つて、入亂れて戰はしたが、新兎、朝山の方にても、數多の軍兵討死して、軍は茲に互角と相見ねました、斯る處に今茨木童子は、山洞より現はれ出でましたが、岩傳ひに山に登り、口に何か呪文を唱へ印を結ぶと相見ねた、すると忽ち空中搔曇り、黑白もわかぬ暗夜となりましたから、新兎、朝山はこれを見て大いに驚き、急に陣を退かんとするに何處ともなく矢の飛來ること、雨の雫に當るが如く、軍勢更に堪へ難く、終に山より追下され、二三丁も退くと忽ち空も晴渡つて、原の如くに相成つた、兩將麓までは退かずして、初め陣取りし處に屯し

て、敗軍を集め見ますれば、死討せしもの八十人、疵を被るもの數知れぬ、されども心利いたるもの共は、討取つた所の小賊の首三十餘を持歸りましたから、兩將は只管喜びつゝ、一先麓へ下り、またこそ來つて攻討つべしと、しづ〳〵と山を下り、諸軍に斯と物語り、討取つた首を見せまするに、人々これを羨まぬものはない、夫より軍の樣子逐一賴國どのに物語りまする と、賴國どのも新兎、朝山が働きを只管賞讃致されましたが、併しこれより後は、更に山洞に責討つものもない、唯徒らに陣を張つて、兵糧を費すのみ、斯くて半月餘りも過ぎました、所が茲に一番最初先陣を承はつて、敗軍致しました藤原保義でございます、暫らく引籠つて居りましたが、或る計畧を案出したから、賴國どのへ一手にて山洞を攻落したいと願ひ出でた、賴國どのも如何あらんと思案を致されましたが今日の場合一日も早く鬼ケ城を攻落して、大江山に向ふ必要がある、其處で保義

に一手征伐をお許しに相成つたから、保義は喜びました保義「諸國の軍兵大將分二百餘人の其の中にて、小身の拙者を、然も只一手にて山洞征伐を仰せつけられ候事、武門の譽れ、また有難き仕合せにこそ候へ、今まで斯る大軍を以て、幾度か攻むると雖も、茨木童子等が幻術の爲に、毎度寄手敗北して恥辱を蒙るさるを拙者一人にて攻滅さんとするは、蟷螂龍車の古語に等し今拙者が手勢僅かに、五十騎、寡は衆に敵せずと雖も、合戰は強ち勢の多少によるものに候はず、如何にもして山洞を攻落し候べし、さりながら四五日は暇取り候はんか、假今何時にもあれ、山洞の方に當つて火の手の昇るを御覽相成らば、山洞陷入りしと思し召して、麓の方へ遁下る奴原を一々生捕り下さいまするやう」と靜かに言上をした、餘り大言でございますから、頼國どのは冷笑ひになり頼國「兎もあれ疾く行つて攻滅し、再び來つて、我に見せよかし」に云はれたから、保義は頭を下げ保義

仰せ心得ましてござる」とお受けをして御前を退きましたが、早速保義に於ては、手勢僅かに百五十騎を引連れて、その夜の中に陣所を立出でました、夫れから次の日になつて樵夫山賤獵師などを駈集めたが、彼是百四五十人集つて、それに手勢を合すと三百人に相成りましたから、此の三百人の者共に言付けて村々在々を馳せ歩かせ、許多の金銀を費して、强健かなる大牛百五十匹を買求め、また薪を多く買ふて此の牛に負はせ、三百人の者共が其の牛を牽いて、鬼ケ城の後の方へ廻りました、尤も道なき所を牛と共に登るのでございますから、間取る事は夥しい、山中にて夜の明し千辛萬苦して、絶頂に登り詰めました而して山洞を遙かに見下して、日の暮れるのを待つて居りましたが、軈て用意の松明に火を燃すと、かの牛の兩の角と尻尾とに括り付けました、夫れから背に薪を負はせ、その薪には油を注ぎ、焰硝を加へた、此處に用意が悉く調ひましたから、鯨波

の壁をドッと揚げると、百五十の大牛どもを、山洞に向つて追下した、愈々山寨焼討の一件でございまする。

第二十七席

人間とは事替つて牛でございます、幾度躍き轉ぶと雖も、一向に弱らない、眞一文字に山洞の裡へ突進みました、茨木童子や棟牛等は此の物音を聞いて「さては又もや敵兵寄來つたか、それッ者共、皆殺しにうち殺せよ」と走り出でゝ之れを見ますれば、こはそも如何に、今度は人間でない、百五十頭の牛が、總身火と相成つたるが、山上より飛來つて、山洞の裡を狂ひ廻るのでございます、いや驚いたの驚かないのて、流名の茨木童子もこれには手も足も出ない、牛の方は角と尻尾の松明、火が背

中の薪木に燃付きましたから、牛の苦しさは譬ふるに物もない丸焼になるだから堪つたものでございますまい、其の苦みに堪ねて、山洞の屋根座敷の裡、小賊どもの部屋々々、何處と云へる嫌ひなく、飛廻り躍り歩きまする程に、忽ち山洞の裡に燃付いて、七八箇所が程燃上つた、折節山風が烈しかつたから炎々と火の手盛んになり、見る〳〵山洞は一圓の猛火と相成つて、黒煙は中空に渦巻き登つた、山中の小賊どもは狼狽へ騒ぎ煙に巻かれ火に焦され、上を下へと騒動をした、これには茨木童子、如何に妖術ありとも、人間を惑はすのみで、鳥獣には施し難い、茨木童子如何に萬夫の勇ありとも、生類には敵すべけれ、猛火を鎮めん方便もない、今は如何とも詮方ございせまんから、手下一同を集めて茨木「一同、今斯く敵の謀計に陥つたれば、此の山洞に住居は協はぬ、此處を立退いて大江山に落延びやう……と小頭の者共、我に計畧がある、斯樣々々致せい」と

言葉短かく言放ち、さらばと云ふので盗み貯へました金銀を小賊に荷はせ、その外要用の調度衣服、鎧兜軍器の類は、數匹の馬に負せましたが、此の勢三百餘人は間道より大江山に向ひました、さうして茨木童子は殘りのものを引連れまして、松明に路を照し、しづ〳〵と山を下りましたが、此方は藤原保義の計畧美事に當り、尚も山上より追々と山草を投下しました程に終に山洞は一堆の灰塵と相成つて了ひました、此の火牛の謀計は支那にす日本にも行はれた戰畧でございますが、保義が軍卒は一人も痛めずして、一時に山洞を攻落したは、軍慮の程こそ賢けれと、後に人々言合ひて賞讃した事でございますが、お話變りまして、さても頼國どのゝ幕下なる寄手の面々は、保義が僅か百五十騎にて、山洞の討手を數り、夜の間に何處へか向ひしと聞きまして大いに驚いた「さて〳〵保義膽太くも、小人數にて山洞に向ひし事、薪木を負ふて火に向ひ、石を抱いて淵に臨む

むが如くである、いと〳〵危き事、さは云へ保義は智勇兼備のものなれば、また如何なる謀計をなすかも解らぬ」と侮り難き思ふ人もございました、さて四五日經ちましたが、或る夜山洞の方に當つて、忽ち火の影炎々と燃上り、煙天を貫きましたから、諸軍これを見て「さては保義謀計を廻らして、山洞を焼討致したと相見ねた、實に智勇の武士かな」と人々心中に羨みましたが、斯くて五更の頃ほひに至つて、寄手の陣中へ五六人の農夫と覺しきものが出て來た農夫「エ、申しあまけす、私共は鬼ケ城の麓に住む農夫でございますが、今宵山洞の茨木童子住家を焼れ、山より遁下つて、私共が家に押入り、休息致して居りまする、依て私ども心を盡して饗應し、多く酒を勸めました事ゆへ、只今眠りに就て前後も知らず居りまする、私等は數年來金銀米穀を奪はれた意恨がございますから、速かに討取らんと思ひまするけれども、何となう恐ろしうて近寄られません、願

はくば御勢を差向け下さいましたならば、只今不人數の茨木が
邊、然もよく睡つて居りますから、擒にせんことは疑ひございま
せぬ、此の事お願ひに參りましてございます」と異口同音に
訴へた、此の陣はこれ小田と島田が陣でございますから、兩
將は此の訴訟を聞いて「さらば他の陣へ知らさず、我々二陣馳
向ひ、茨木等を討取つて、高名を現はすであらう」と取るもの
も取敢へず用意を整へました、此處に兩陣合して一千五百餘人
かの農夫を案内として、山の麓へ廻り行きましたが、斯る處へ
山間より、茨木童子等百餘人、悠然として下り來つた、而して、
かの小出と島田が、空陣の中をしづ〳〵と打通り、何處となく
落ちて行く、これをば外の陣より見付けて「さては山洞の落武
者なるぞ、夫れッ討取れい」といふ程こそあれ、數多の軍兵そ
れ〴〵に支度を整へ、茨木等が跡を追駈けましたが、棟牛小賊
三十人許りを引連れて取つて返し、追來る寄手に渡合ひ、おめ

き叫んで戰つた、其の間茨木童子等は、行程遙かに落延びて了
ふたから、棟牛も時分はよしと、大形に敵を斬捨て、またしづ
〳〵と落ちて行く、餘りに手太き働きに、寄手のものは怖れを
なし、强てはこれを追駈けも致しませぬ、おめ〳〵と見遁し遣
り、小賊の首六つ七つを斬つて捨て、勝鬨作つて凱陣を致しま
したが、此方は小出、島田の兩將、農夫等が案内にて二十町許
り行く處に、忽ち林の茂つた處で、農夫等は何處へ行つたか
見ねず相成つて了ふた、兩將は案内を見失ふて、其處此處と尋
ねましたけれども、遂に知れない、これは何うした事ぞと猶豫
ふ處に、我が陣所の方に當つて、鬨の聲遠方に聞ねまするにぞ
「さては彼方に事あり、疾く引返せ」といふより早く、兩陣一
度に馳歸つて、樣子を聞きますれば、山洞の茨木等、我が空陣
の門を通つて、落行つたと聞いて、開いた口が塞がらぬ「ゲエ
ッ殘念な、さては又賊兵どもに誑られたか、口惜や」と兩將互

に歯がみをなし、彼方を白眼んで突立つたが、八方の菖蒲十日の菊、此の時夜は明離れて、山の端白く見わ渡つた。

第二十八席

さて鬼ケ城の山洞は潰れて了ひましたから、頼國どのより頼光公へ此の由を申しあげた、藤原保義は莫大の手柄でございますから、追つて歸京の上褒賞の御沙汰と相成るのでございますが二三日休養の上、此の勢は、更に大江山へ向ひました、さてもこれ亦度々酒呑童子の妖術にかゝつて、敗北を致すのみでございます、今日しも先陣に進みました阪田公時と、卜部季武の陣でございます、兩陣隣り合せにてありましたが、或る夜阪田の陣中より、卜部の陣中に礫を打つこと雨霰の如くでございます

それが初めの程は小さい石でありましたが、後には人の頭程なる岩の碎けたのをうち付けます、卜部が陣の者ども大いに怒り、大音に呼はつて「汝等何等の意恨あつて、斯る狼藉を致すぞ」と聲々に叫んだが何の返答もない、たゞ無暗に投附けるから、卜部が黨等はます〳〵怒つて「さらば此方よりも打返せ」と手に〳〵大石を拾ひ取つて、阪田が陣中へ投入れました、阪田が陣中の者どもは、此の礫にて頭を破られましたから、大いに怒つた、大音聲を發し「ヤア〳〵卜部どゝのゝ御陣に物申さん抑も何等の仔細あつて、斯る狼藉をせらるゝぞや、意恨あらば尋常に名乘つて、將負を致されい」と只管に叫んだから、卜部の陣中これに答へて「汝等何故さる事を言ふや、汝達が方より我が陣へ、礫を打つが故に、また此の方よりも打返したのぢや」言ふのを聞いて阪田の者怒り「我が方より礫を打つたる覺はない、汝等空言を言ふな」卜部の方答へて曰く「我々何ぞ空言

を云ふべきや、汝等僞りを言ふな」と互ひに爭ふたが、此の間も尙双方とも、礫を打つことは更に止みません、終ひには大友の陣へも投込めば、碓水が陣へも礫をうつ、それ故大友、碓水が陣中のものは大いに怒り、武具に身を堅め、刀を拔いて切つて出でました、據ろないから阪田、卜部が陣よりも、拔連れて馳向ひ、或は十人二十人、三十人五十人と追々走り出で、追ひつ返しつ戰ひましたが、後には兩陣殘らず打つて出で、双方の大將達も馬に跨つて指揮をなし、むめき叫んで戰ひました、外々の陣では之れを眺めて、何事であらうかと思ひますから、競れも走り出でましたが、平井保昌は大音聲を發し「保昌」兩陣の方々、同士討をなし給ふは何事ぞや、互に意恨あらば、總大將に訴へて、如何ともなし給へ」と呼はりましたから、兩軍の者共もこれを聞いて、尤もと思ふたか、やう〳〵に靜まつた、さて次の日に至つて、此の爭ひ仔細如何にと尋ぬて見ますると固よ

り何等の意恨もない、たゞ阪田の陣中より、礫を打たるより事起つたといふ、阪田此の事を聞いて心安からず思ひ、軍卒を殘らず呼集めた、公時「其の方等は、何等の仔細あつて、他の陣へ漫りに礫を打つたるぞ」責問ふと數多の軍卒一同に答へて「我等は一向に礫を打つたる覺ねはございません」といふ知らぬ事はないと、數度責問ひましたけれども、實もつて知らぬといふ、所が茲に一人の雜兵、病にてヒタと打臥し、食物小屋にありましたが、此の者やう〳〵に這出で來り、取次を以て言ひけるやう、昨夜五六人の盜賊めきたる男ども、大いなる布風呂敷を背負ひ來りましたが、御陣の屋根に登ると、かの風呂敷の中より礫を取出し、卜部どの〻御陣へ、只管投込みましてございます私は身中痛へ痺れて、聲だに出でませぬ故、衾引被つて打臥して居りました」と告げたから、阪田は始めて成程と悟つた同時に公時程の豪傑も「所仮は一通りではいかぬ、妖術を以て我々

の陣中を騒がす上からは、何うにか工風をしなければならぬ」と只管工夫をぞ廻らしましたが、斯くて十日許り何事もございません、然るに或る夜の事、俄かに大風起つて、陣中の燈火殘りなく消失せて了ふた、また點すればまた消るといふ有様、如何はせんと猶豫ふ折から、寄手の多田滿吉の陣中へ忽ち〳〵と雨降來つた、それが陣中に寢ねたるものゝ頭に當つたが、痛い事此の上ない、ヒヤッと大聲あげて、痛い雨ぢやと見ますれば雨ではない、三ッ羽の箭でございまする、軍兵どもも之れが爲に疵を蒙るもの數多出來たから、次の日に至つて、其の箭を見まするに、悉く二階堂が家の印が附いて居りますから、大いに驚いて大將に斯くと申しました、大將滿吉之れを聞かれて心中に思ふやう「ハ、ア、さては去ぬる日山賊を攻めたる時、彼等は兩度敗北し、我は少しく功名を顯はしたるに依り、その功を妬んで斯る僻事をばなすものであらう、如じ穩便に打捨て置かんには……」と其の儘外へも言知らず、引隱してぞ居りました

然るに其の次の夜も同じ事、頻りと矢を射掛ける、矢はと見れば矢張二階堂の印が入つてございますから、滿吉も今は腹に据ね兼ねて「さらば今より押寄せて、腦病者の眼を覺さすであらう」と數多の軍勢武具堅め、一度にドッと押寄せました、此方では二階堂、山洞よりの夜討と心得ましたから、士卒に指揮して討つて出で、兩軍入亂れて戰ひました程に、討死する者いと多かつた、さて夜明に及んで、兩陣互ひに引取りましたが、跡にて能く〳〵糺し見ますれば、之れも酒呑童子等がなす業と知れました、山洞征伐中々困難でございまする。

第二十九席

調べて見ますれば、二階堂が方にては、一筋の矢を射た事もない、唯所持の矢を多く盗まれたといふ事でございます、また泉州荻野の陣中では、太刀鎧などが残らず紛失したので、驚き騒いで捜しましたが、これが大和の中村が陣中に、此の太刀鎧などが隠してあつた、其處でこれも互に口論となり、果は合戰と相成りましたが、此の事も中村が者どもの知らぬ事で、皆酒呑童子が妖術のなす所でございます、斯る怪しき事夜毎にありましたから、寄手も今は持餘しまして、五里三里づゝ退いて陣を取りました、併し斯ては果てじと思ひましたから、茲に四天王の連中集つて評議をした、所へ鬼ケ城の山洞滅びて、その寄手勢は大江山攻の方に加はる事に相成りましたから、寄手は俄かに色めき渡つた、頼光公を初め四天王等は此處に評定を致しまして、さらば明日は山洞を攻むべしと、諸軍へ限なく觸れ渡しましたが、即ち明くれば卯月五日の早天に、二萬五千の勢を二つ

に分けて、一萬を麓に殘し、二萬餘騎にて攻登りましたが、音に名高い大江山でございます、道幅狹く岩角聳へ、溪水滔々と流れて、一二人の外は足の運びも惚はぬ道、それをば四方に亂れて登つて行く、此の手の大將を承はりました頼國ごのも、共に陣を進めまする處に、圖ある岩の上に一人の美少年、卒然と現はれ出でたが、忽ち身を飜へして空中に飛上り、頼國ごのゝ御旗竿の中央に取付き、御旗を奪ひ取つて、また岩角に飛登つた、されども旗持の士卒强勇のものでございましたから、旗竿に確と取付き、空中に引揚げられた、所がかの曲者は岩を傳ひ谷を飛越ね、旗と旗持とを引搶ぎ、何處ともなく遁失せて了ふた、頼國ごのゝ諸卒等はこれを眺めて、たゝあれよ〳〵と喚くのみ、岩頭高き所でございますから、如何とも詮方ない、只見物して過しましたが、先鋒の諸軍は斯んな事とは知りませぬ、エイ〳〵と聲勇ましく攻登りましたが、山洞近くなりける

處に、怪しや山洞の裡に當り、陣鉦陣太鼓鯨波の聲、物凄まじく聞ねるにぞ、さては早や我より先に、抜掛の勢あると覺ねたり、急げ〳〵と押寄む處へ、忽ち小高き所より一隊の人馬出來つた、眞先に白地に金の二つ引の旗押立てゝ其の下に一人の若大將、悠然と馬に跨つたが、一つの首級を槍の尖に貫き、大音に呼はるやう「源頼國どの、自ら向つて山洞の賊將酒呑童子を討取り給へり、疲れも疲陣々々」と聲々に呼はつた、先陣の大將これを聞いて、能く〳〵見まするに、實に頼國どのゝ御旗に相違ございませんから「さても頼國どのは心利いたる大將かな夜の中に山洞へ向はせ給ふたのであらうか、能くもかゝる强敵を、小勢にて討取り給ひし事よ」と、夫れより陣を引返して、麓の方へ下る、此の事を追々に言繼ぎましたから、諸軍は皆引返して山を下る、然るに實の頼國どのは之れを知りませぬ、やう〳〵山の半腹に登り給ふ時、二階堂と中村が凱陣して下るの

と行合ふた、頼國どのゝ軍兵之れを見て「やよ、之れは頼國どのゝ御陣なるぞ、疾く馬を下りよ」と呼はつた、二階堂右近は不審に思ひ「頼國どのは疾く山洞に進み給ひ、酒呑童子を討取られと聞いたに、今また此處にた頼國どの、さても怪しや」と云ふ處に、かなたの岩の上に一人の武士あつて「夫れは實の頼國どのでない、山洞の酒呑童子なるぞ、油斷を致すな」と呼はつた、斯くと聞いて二階堂、中村の兩將は、如何にも旗が見ねませぬから、さては と心に怪む處に、忽ち耳下に一つの狼烟ドッと擂き、煙天に昇ると見ねましたが、黑雲颯と山を包み、東西も分かぬ暗夜と相成りました、二階堂、中村はこれを見て「さてこそ酒呑童子が奇術なれ、者ども生命を捨てゝ切入れよ」と下知に從ひ數多の軍兵、切尖を揃へて斬つて掛りました、それ故頼國どのゝ陣中にても、同じく抜合せて戰ひましたが、されども暗夜の滅多打、手負死人は數知れませぬ、半時計り戰ひ

ましたが、忽ち頼國どのゝ御陣敗北して、麓へさして逃下つた夫れッ追討せよと、二階堂、中村も麓へ下りますると、今まで暗夜であつたのが、雲晴れて原の眞壹と相成つた、其處で館く見ますれば、之れ實の頼國どのでございましたから、兩將は大いに驚いて、遙かに陣を遠ざけ、四天王よりして、頼國どのへ此の事を只管に詫入つた、頼國どのも最初の程は承引なかつたが、全く山洞の酒呑童子等が、妖術の謀計より出でたる事と知れましたから、何の事なく御赦免と相成つた、されども此の時、双方の死人三百人、手負は其の數知れませぬ、これは山洞の甫慶山袈裟太郎が、酒呑童子の命に依り、初め頼國どのゝ御旗と旗持を奪ひ去り、其の旗を押立てゝ源頼國と名乘つて山洞より出來り、旗持の首を切つて槍に貫き、酒呑童子を討取つたと呼はつて、寄手の者を欺いたを、寄手はこれを實と思ひ、軍をもせず凱陣して、空しく山を下り大いに恥辱を蒙つたる譯でございまする、斯の如きへマな軍を遣りましたから、暫く休戰と云ふ命令が、頼光公から下りました、其處で寄手の軍勢は一先福知山へ引揚げ、當分休息の姿でありましたが、茲に頼光公は一計を案じ、一氣に攻落さんと考へられました、所へ阿部晴明どのよりの使者到來といふ愈々山伏問答の一節でございまする。

第三十席

さて是れより一氣に大江山へ乘り込むと云ふ事になりました、折から頼光公には、其の日から少し御病氣でございます、一同誠に心配して居りましたが、然に翌朝に相成りまして、彼の安倍晴明の一子安倍吉平が、早馬を飛ばして御出でに相成りま

して頼光公に御面會をしたいと云ふ事でございます、病中ながら他ならぬ安倍の御子息でございますから、早速御會ひになりました頼光「ア、、吉平殿には何か火急の御用で……吉平「左樣にございます、父晴明より密々申し上げたき事ございますれば、何卒御臣下をお遠ざけの儀願ひとうございます頼光「ハヽア、左樣でござるか、心得ました」其處で頼光公はお側のものを遠ざけになりまして頼光「何卒仰せを願ひたい吉平「それでは申し上げますが、昨夜父晴明神夢を見ました、其の御神託に、大江山千丈ケ嶽と云ふ所は容易ならぬ場所である、且つ之れに立ち籠りたる酒呑童子を討つは之れ又た容易でない、依って斯樣々々かく〳〵に致せよとの事でございます、其の方參って此の由傳へよとの事で參りましたが如何でございませう、計略を持てお討ち取りありますが、よろしき樣に心得ます」之れを御聞きに相成つた頼光公は誠にお喜びに相成りました頼光「イヤ、千萬辱

けなうござる、實は鬼ケ城征伐に少なからざる人命を損ひ、漸く藤原保義の計略に依つて、山寨を滅ぼした事でござるが、大江山は又一段の計略を用ひんければ相成らぬと、苦心を致して居りました所、誠に辱けなう存ずる、父君へ宜敷御傳へを願ひたい」云はれて吉平は滿足を致し、京都へ立ち歸へりました、是れより頼光公は、平井保昌並に四天王をお召に相成つて評定に及ばれました、其の結果が遂に安倍晴明の計略に從ふ事に相成りました、即ち其の計略と云ふのは御承知の如く、少人數でもつて修驗者の姿に扮立ち、酒呑童子の山寨へ乘り込み、最後には、晴明より受けました神變不思議の酒を飲まさうと云ふのでございます、其處で軍勢一同は法恩寺に止め置きまして、頼光公が四天王に平井保昌、都合五名のものをお連れに相成る事になりました其の扮裝は藤の衣に笈を負ひまして、兜の代りに頭巾を戴き、鎧ではない袷掛を召されまして、金剛杖を突きな

から、山和葛城の山伏が伯者なる大仙へ詣するといふ体にして、銘々假に山伏の名前に改めました、卽ち頼光公は御年四十九歳光寛坊と云ひました、綱は四十八歳源光坊、貞光は五十四歳で貞觀坊、秀武は四十二歳で安樂坊、公時は三十八歳公觀坊と改めました、そこで大先達は井昌院權大僧正法印、今年五十八歳なる平井保昌が笈櫃を背負ひまして、金剛杖を突きました、其の有樣、何う見ても山伏としか見へません、其處でいよ〳〵出立でございます、音無瀬川を渡つて鬼ケ城の山裾を通り、大江山だん〳〵と山又山を越へまして、由良川の上流を渡り、丁度日も入相の、遠寺の鐘諸行無常の中腹近く參りますると、其處に一際茂つた森がある、社祠の境内と見へまと鳴り響く、主從六名は立ち止つて居りますると、其處へ一人の法師がお社祠へ燈明を供へに來たものと見へます、森の中へずん〳〵迯入つて行くから、平井保昌が保昌「法師、チと物を御尋ね申す

此の御社祠は何神をお祀りになります　法師「ア、御修驗者でござるか、此れは當國第一の大江山權現と申します、天照皇太神宮を御祀りしてございます　保昌「ハ、ア成程、して法師、天照皇太神宮とあるなれば幸な事、我等は當御社祠へ、願文を捧げたいと思ひます、擂ひませんか　法師「ハア、其れは參詣人の心のまゝ、御勝手でございます、然し貴方方は何處のお方か存せんが當山には鬼賊棲居致し、爲に申の刻を過ぎましては、登るものは一人もございません、能く氣を付けて、參詣がすみましたら速に下山なさりませ、今日は大分時刻が後れて居りますから御免なさい」と云ひ捨てゝそのまゝ向ふへ行かんと致しますから平井保昌法師を呼び止めて　保昌「アイヤ法師、暫らく御待ちあれ是れは甚だ些少でござるが、我等の布施でござる、御納めを願ひます」と何程かの金を紙に包んで與へました、法師は喜びまして、其の金を推戴いて山麓の方へ下つてしまひました、此方

は願文を認める事になりましたが、此の中での學者は平井保昌でございます、願文をさら〳〵と、矢立を取り出して認めましたが、其の願文は詰り惡氣退散武運長久を祈る文案でございます、此の時六人が突いて居る杉の杖を、地中に挿し込んだのが不思議にも根を生じ葉を生じ、遂に繁茂る大木と相成りました今に殘つて居りまする六本杉と云ふのは之れでございます、さても一同は、社殿にぬかづきまして、終夜祈念を凝らし、翌朝に相成つて用意を致しました握飯を食ひ、清水に喉を潤にして、一服致して居ります所へ、異樣の風体を致した男が山麓の方から、ドン〳〵と登つて參りましたが、今一行の体んで居りまする、傍を通つて行き過ぎんと致しました。

第三十一 鬼

是れを眺めた平井保昌、怪しのものと見留めましたら保昌「アノ夫れなる御人、暫らく御待ち下さい、我等は大和國葛城より伯耆國の大山伏でございまする、少ともものを御尋ね致したい」と呼び留めました、彼の男は怪訝な顔をして、六人の顔をつく〳〵と見て居りましたが　男「アヤ、お前さん等は成程山伏修驗者だ、何んか用事かい　保昌「ハイ、我等は神社佛閣を順拜する身の上、此の奥に有難ひ神にまれ、佛にまれ在しまさば敬へて下されたい　男「ヘエン、此の奥には神社や佛閣なんかはありやしチエよ、お前等は知らチエか知らぬが、此處は音に名高い大江山、此の奥へ行くと千丈ケ嶽と云ふのがあつて、其處には酒呑童子と云ふ大將が住まつてござるのだ、お前等の行くべき所でチエから、さあ早く下りな　保昌「ハ、ア、酒呑童子の大將と云ふと、何んでござるな　男「お前等知らチエのか、山伏にも似合はチエな、御大將と云ふのは、素を正せば、下總國にござつた平

新王將門殿の遺子相馬太郎良門樣、今更めて酒呑童子と申される。保昌「ヘエン、其の大將は何をしてござるので……」男「解らぬエ男だな、人のものを只取つて遊んで暮さうと云ふ盜賊樣だ、お前等は山伏だから、まあ一遍來て見ヲエ、恐ろしい剛的なものだよ、頼んだら一夜位の宿は借して下さるだらう」保昌「アレ、恐ろしや〳〵盜賊さまでござるか……」男「ナアに、そんなに恐くはヲエ、金を持つた旅人なれば、命も恐いが、多寡の知れた山伏、人の手の内を貰つて廻るもの、危なげもなからう、來るなら蹤いて來な」保昌「然らば我等の一行に一夜の宿をして下さるとな」男「如何にもお首魁に頼んで遣るから……」保昌「然しお尋ね申しますが、命に關はる樣な事はありますまいか」男「ハヽア、山伏如きを殺した所で、何の手柄にもならヲエ、心配しヲエでさあ來な」保昌「夫れでは何分願ひます」云ふので彼の手下と見へました男は、前に立つて進みます、後からは六人の主從、互に

顔見合せて、にこ〳〵致して居ります、やがて山又山の籠續になつて居りまする大江山の山中を登り下りして、漸くの事千丈ケ嶽へ登り着きました、此處が岩屋の大門と見へます、大きな石門がございます」男「ヤア山伏、暫らく此處で待つて居な、俺チヨツクラお首魁に話をして來るから……」云ひながら石門の内方へすゝと這入つてしまひました、やがて其の男は、酒呑童子の前に出て來ました、此奴物見に行つたものと見へます、寄手の陣屋の樣子を詳しく物語りました後、男「時にお首魁樣に申し上げます、只今途中にて山伏に出會ひました、宿めて遣ると云つたら、宿めて下さいと云ふから、今連れて來ました」云ふのを聞くよゝ、傍に居並ぶ一同の面々「ヤア權太、其の伴れ來つた山伏こそ、事によれば頼光が廻しものでないか……お首魁御油斷相成りませんぞ」云つたが酒呑童子は誘拐して來た女中共に、酒を酌がして大杯を傾けて居ります、能く書に書いたの

を見まするとと、酒呑童子と云ふのは、猛々の様な顔をして、脇息に凭れながら、大盃を片手にして居る書がありますが、あんな顔ではございますまい、花葛が惚れたくらゐの男でございますから、美男子であつたに相違ございませぬ、案外此の大盗賊とか云ふ様なものは、見掛けは眞に優しい顔をして居るもので ございます、寄手の大軍を前に控へながら、泰然自若として酒を飲んで居る所は、なか〳〵のエラ者、小頭のものが云ふのを耳にも掛けず 酒呑「權太、それは全くの山伏か 權太「ハイ、夫れほど私が調べましたに、眞の山伏か偽物か、間違へる氣遣ひはございませぬ、其の證據には、盗賊の岩屋だと聞いて、生命を取られはせぬかと心配して居りました、此の一條でも眞の山伏に相違ございませぬ 酒呑「ウム……、どうも是れまで此の山中へ人が訪ふて來た事もないに、修驗者の身とは云ふものゝ、岩屋に宿らうと云ふのは、ても不思議である……權太 權太「ハイ 酒呑「何は

兎もあれ、是れへ連れて來い、偽物か眞のものか我が試して見る程に……權太「承まりました」と權太の奴は、表へ指して出て參りました、此方は酒呑童子、早速白衣を纏ひ緋の袴を穿ち、立派に身裝を着飾りました、左右には茨木童子を始め、甫慶山袈裟太郎、棟牛、常陸音夜叉等十數名、何れも一騎當千の強者でございます、一同席を列ねて控へて居ります、又兩側には手下の奴原、數百人、すつと並んで居ります所へ、案内に伴れられて進み出でました六人の主從、此の有樣を見て、如何にも恐れた樣、遙かに兩手を突いて控へて居ります、一同の視線は此の一行に集りました、ジロリと眺めた酒呑童子 酒呑「あゝ、夫れなる山伏、何故此の山中に參りしか、速かに仔細を述べよ」問はれて此の一行の智慧者でございまする平井保昌、顔を上げて保昌「麼は御尋ねに預かりまして恐れ入ります、我々は決して怪しいものではございませぬ、大和國より伯耆へ參りまするもの

道に踏み迷ひまして、當所に參りましたものでございます　酒呑「こりや默れ、怪しい事を申す、其の方は先達か　保昌「左樣にございます　酒呑「先達たる者が道に踏み迷うとは如何なる譯か　保昌「ハイ、夫れは大いに相違致します、山川驛路の案内するものを俗に先達と申しまする、夫れは大いなる間違ひ、私は法の道を敎ふるの先達でございます、釋尊いまだ沙舍利仙人と申された時に、蟠羅梵志に逢うて、童子の案内を受けられたのも同樣、道案内とは違ひ法の道を敎へる先達でございます　酒呑「ウム、成程其の答なか〳〵面白い、さては眞正の山伏であらう、我も若き時聊か佛法に志したが、山伏道は未だ存じ居らぬ、如何なる事をするものか我に敎へ呉れい　保昌「ハイ、御尋ねでございます我等不學ながら聊か修驗者山伏の事だけは心得居りまする、何なりともお尋ねあらばお答へ致します」之れより保昌如何なる申し開きを致しますか、一寸一服致しまして、申し上げます。

第三十二席

さて之れを聞いた酒呑童子は酒呑「ウム、夫れでは尋ねるが、凡て僧侶と云ふものは、諸宗ともに頭髮を剃り落し、髮なきが常である、然るにお前等は有髮であるが、如何なる事か、殊に武士にあらずして刀を佩び、檀上に佛体を祀るは如何なる譯か」此の頭は、坊主と云へば、皆頭を剃つたもの、明治の坊主は、頭に毛を生やして居るのが往々ある肉食もすれば、妻帶もする怪しからぬ僧の行ひも屢々耳に致しますが、之れでは佛法を信仰するものゝ少なくなる譯で、歎かはしい次第でございます、酒呑童子に問はれて平井保昌「お尋ねにございます、如何にも僧俗混合の樣にございますれど、其の往古三十三代推古天皇

の御代、大和國御所の向原に、役の小角と云ふもの、父を加茂連と云ひ、母を梅子と云ふ其の夫婦の中に成長を致しましたが七才に、して父母に別れ、人を助けんとて、深山に分け入り、遂に五色の兎の案内にて、山を廻り、白鳳四年に至り、大峰山を開きました、我國修驗者の始めは之れよりでありましたが、此の小角行者として頭髪を剃る事でございませぬ、是れ唐土にても僧にして髪を伸ばしたと同様、釋尊とても頭に髪を戴いて居ります酒呑「ウム、相解つた、して山伏と云ふのは如何なる所から出た保昌「左様でございます、野に臥し、山に伏す所から、世俗に山伏と稱へ居ります酒呑「ウム成程、して其の行場と定めたるは何れにあるか保昌「左様にございます、先ず大和國大峰山、熊いて同國葛城山、津の國の六甲山、豐前の彦山、肥後の阿蘇山、伯耆の大山、南部の恐山、此の七山でございます、別に三高山と名づけて、紀州の釋迦ケ嶽、加州の白山、駿河の富士山

是れだけを行場と定め居ります酒呑「ウム、して汝等の法衣を鈴掛と名ずくるは、如何なる譯か保昌「ハイ、そは笹分の言葉の誤りでございます、總て修驗者ば深山幽谷を廻り、笹や芒を分け入つて、行脚致しまする、是れをば笹分け法衣と名づけ居ります酒呑「ウム、なか〳〵面白い……こりや者共、修驗者に膳を與へ遣れ」ハッと答へて手下の者共、料理場へ行つて、其の用意にかゝります、山寨と云へども、まるで御殿の樣で、中々贅を盡して居ります酒呑「して尙ほ尋ねるか、其の金剛杖と云ふは如何なる譯で所持するか保昌「されば是れは、金剛力を借りると申し、握りを丸く致すのが、天の太極に象り、二の角は總て極陰を象り、三ッに取りては天地人、四ッにしては須彌の四天に象り五ッにしては、仁義禮智信、或は地水火風空六ッにしては六氣に象り、七ッにしては七曜星、八ッにしては八葉連臺の形でござる酒呑「ウム、相解つた、して其の脚袢の色は……保昌「左

様、天地の色を取つて鼠と白とでござる　酒呑「ウム、して其の結び袈裟は……保昌「左青龍、右白虎、前は朱雀、後は玄武、前四ツ後に、三ツ、七曜合して二十八宿でござる　酒呑「さらば其の八ツ目の草鞋は如何に……保昌「さらば是れは釋尊八相成道の形を取りました　酒呑「ウム、して汝は酒肉を禁ずるや如何に……保昌「左様にございます、釋尊ら淨肉を許すとあります、又五戒の内不飲酒戒に至つては、頗ぶる保つに苦しみまするに依り、酒は許してございます、酒肉共に施主の馳走によりましては、何時でも頂戴仕つります　酒呑「ウム、面白い修驗者が言葉……者共、早く料理を取らせよ」ハッと答へて手下の者、先程より料理を致して居りました酒肴を、ズッと夫れへ持ち出でました　酒呑「さあ山伏、斯る山中故別に馳走もないが、ゆつくり飲で呉れ」云ひながら、一番に酒呑童子は大杯を受け取つて、なみ〳〵と酌がせ、飲み盡しました、其處で彼の六人の主從は、互に献し、或は酬致して居りましたが、能き頃を見計つて、彼の阿倍晴明より受け取りました神變不思議の一味の薬を、彼の銚子の中に入れました、此の薬はつまり妖術を施す事が出來ぬ一品でございます、夫れを銚子の中へ投り込んだのを、誰の目にも付かなかつたのは幸ひでございます、其の銚子がぐる〳〵と廻る其の内に、大變に能く利きました、酒呑童子を初め小頭手下のもの一同に、氣が何となく晴やかになり、華胥の國へ遊びに行つた樣な良い心持ちと相成りました、何れも皆眞赤の顔を致して、ニコ〳〵笑つて居ります、時分は良しと立ち上りました頼光公は、佩刀を帶した其のまゝ頼光「あゝ御大將、一さし舞を御覽に入れます」と其のまゝ扇面をサッと開き、自ら小唄を謠ひながら、其の處にて一舞踊ひ了りました、此の体を眺めた、彼の酒呑童子　酒呑「ヤア見事々々、愉快な事ぢや、いざ一献酌いで呉れ」と頻りに大杯を傾けて居りましたが、不圖目についた酒

呑童子は酒呑「アイヤ修驗者、先程よりの答悉とく理に叶つて滿足致したが、其の腰に手挾むは何ぢや、半俗半僧の境界に致して、太刀を佩くとは如何に、よもや、彌陀の利劍ではあるまい、返答如何に……」と呼はつた、其の時に頼光公は、眞先に進み頼光「お尋ねにございます、新客の身を持つて先達に先立ち、答を致すは恐れ入りますが、當屋形の主人は我等が爲には今宵の大檀那、施主なる人にお答へを致す、そも我々が腰に帶した此の佩刀は、彌陀の利劍にあらずとは能くも云はれたものかな國家を守る利劍でござる、天下に仇する惡人を退治致す、太刀の切れ味、今御大將に御覽に入れる」とスヽスツと童子の前に進んだと相見へましたが、頼光公彼の大太刀の長柄に手を懸くよと見ねると、スバツと拂つた一文字、忽ち酒呑童子の首は遙か空中に飛び上りました、いよ〳〵山寨滅亡のお話、今一席を以て終局と仕つります。

第三十三席

斯く脆くも首が飛びましたは、利劍の力でもありますが、全く神變不思議の酒のため、身体の自由を失つたからでございます首は遙かに飛び上りました、是れを眺めた賊の奴原、それ曲者油斷をするなと立ち上りましたが、何れも酒のために足を取られ、よろ〳〵バツたり其の場に倒れ、何うする事も出來ませんそれッと主從六名等しく、腰なる太刀を拔き連れて、片つ端より切り廻りましたが、能く切れるの切れないのて、大根か蘿蔔を切るが有樣、お流頂戴とあつて次の間、或は臺所にて酒宴に及んで居りまする小賊共は、彼方に倒れ、此方に倒れ、ゴロ〳〵と寢込んで居りましたが、此の騒動に起き上つて來まする奴を

小口より切り殺しました、僅か一時か二時の間に、死骸は積んで山をなし、血は流れて川となるの有様、此の勢に數多の小賊どもは、コリヤ協はんと云ふので、蜘蛛の子を散らすが樣に、勝手知つたる山道をドン〳〵と逃げ出しました、此の時四天王に於ては、合圖の狼煙を揚げましたから、麓の方にて豫て待ち受けて居りました一手の軍勢は、それッ進めと云ふので、ドン〳〵山洞へ押寄せましたが、其の途中にて逃げ惑ふて居る小賊共は、悉く平げ山洞内に入り込みました、此の時先刻より納戸の内に潜んで居りました三四十名の女共ば、ドヤ〳〵と主從六名の傍に駈け寄つて「生命の恩人樣、有難とう存じまする」と嬉し涙に呉れて、ドッと伏しましたが、此の女どもは何れも由緒ある公卿の姫たち、或は豪家豪農の娘どもですから、主從六名は是等を慰めまして、軍兵に守護をさせ、急に下知を傳へて、山洞を焼き滅す事に相成りましたが、兎に角盗み取つ

なる品物を調べんければ相成らぬと、部屋々々より運び出しました品物は實に夥多しいもの、盗むも盗んだりな、實に寶の山は此處かと思ふ許り、金銀財寶は累々と積んである、部屋々々の裝飾なり、器具調度は善盡し美盡し、金殿玉樓の有樣、一同はこれを見て驚ひたが、先づ目ぼしきものだけは洞外に出し、岩屋には火をかけた、遂に千丈ケ嶽の岩屋は、茲に全く灰燼と相成りました、依て頼光公を初め一同は、凱歌をあげて、福知山の本陣に引揚げましたが、本陣に歸つて見ると、安倍晴明が同じく山伏姿で、乘り込んで來て居る、頼光公は對面に相成つて、萬々禮を延べまするとと、晴明に於ては「頼光どの、目出度賊徒退治が出來て、眞に嬉ばしう存ず、實は忰を以て申し上げたる後、元伊勢に參籠なし、七日間の祈禱を致し居りました幸にして神助あり、國家のため、大慶至極に存ずる」とて此處に總勢凱陣の祝を致しましたが、岩屋に誘拐されて居りました

女どもは、それ〳〵親許へ軍兵を付けて引き渡す事になり、二万五千の軍勢は、せい〳〵どう〳〵と、京都へ指して立ち歸りました、逐一の次第を關白殿へ、言上に及びまするとと、夫れより主上に申し上げ、其の功によつて、頼光公は官位昇級、平井保昌及び源頼國並に四天王の人々、其の外手柄ありましたるものは、それ〳〵論功行賞に相成りました、只今なれば功何級とか勳何等とか云ふのでございます、之等の事は詳しく申しあげました所で、別段面白い事はございませぬから、目出たく鬼賊退治の済みましたを以て、本編の終りと致しまする、尤も本編には伺ひ洩れの箇所も澤山ございます、棟牛の傳や市慶山袈裟太郎の履歴など申しあげたうございましたが、何分紙數に限りがございますから、枝葉に渉る所は悉く省きました、尚此の鬼ケ城と大江山を攻めまするに就て、其の戦爭談は中々多いのでございますが、一二妖術を使ひました丈で擱置き、何の造作もなく岩屋を滅したやうになりましたのは、全く演者の下手な所と思召して御容赦を願つて置きまする、さても音に名高い大江山、見世物師などが、これは丹波大江山にて生捕りました熊でございい、巨躰でございと囃し立てまするも、原はと云へば酒呑童子が棲家を致して居つたからでございませう、先はあら〳〵ながら右まで、なが〳〵御退屈さまでございました。

相馬太郎後編

酒呑童子

（おわり）